

学内広報

2016.3.18

no.1479



特別号

2014年度大学教育の達成度調査

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室の委託を受け、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第7回目にあたり、2015年3月に2014年度の卒業生3,159名を対象として実施し、2,494名から回答をいただき、回収率は78.9%であった。調査の実施には各学部にも多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。先にも述べたように、本調査は、本年度で7回を数えた。このため、本報告書では、過去7回の調査で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は7回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生諸氏の調査へのご協力をお願いしたい。

2016年3月
大学総合教育研究センター長
吉見俊哉

調査実施方法

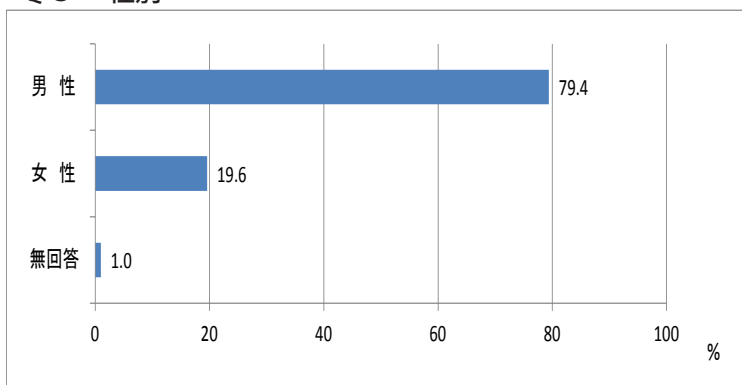
- アンケート配布日 : 2015年3月25日(卒業式)
- 2015年3月卒業生数 : 3,159名
- 有効回収数 : 2,494票
- 回収率 : 78.9%(回収率は、有効回収数/卒業生数で計算した)

※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。

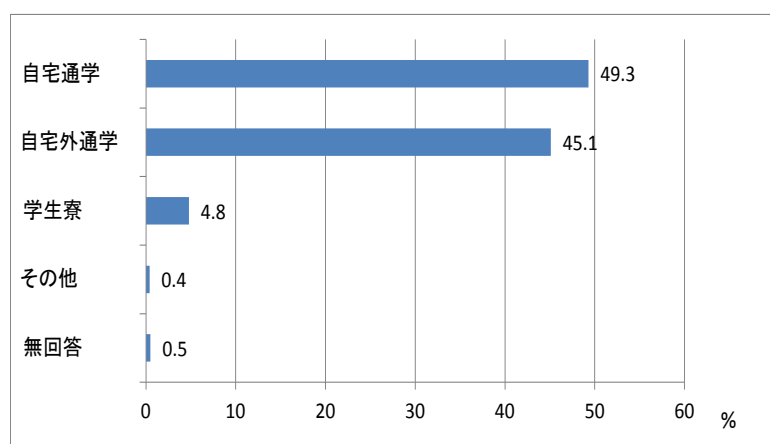
回答者の特性

Q 5 性別



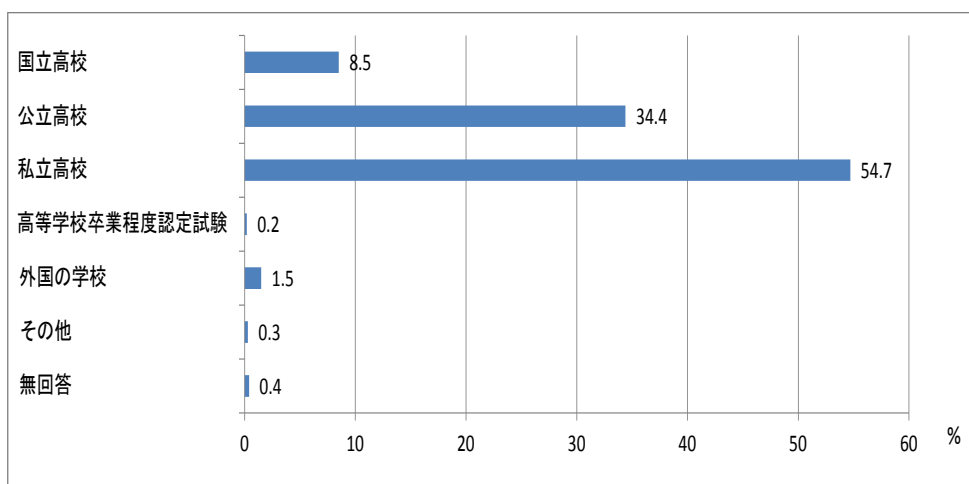
回答者は男性が8割（79.4%）、女性が2割（19.6%）となっている。

Q 6 通学



回答者のうち、自宅通学は半数（49.3%）、自宅外通学は45.1%で、学生寮は4.8%と少ない。

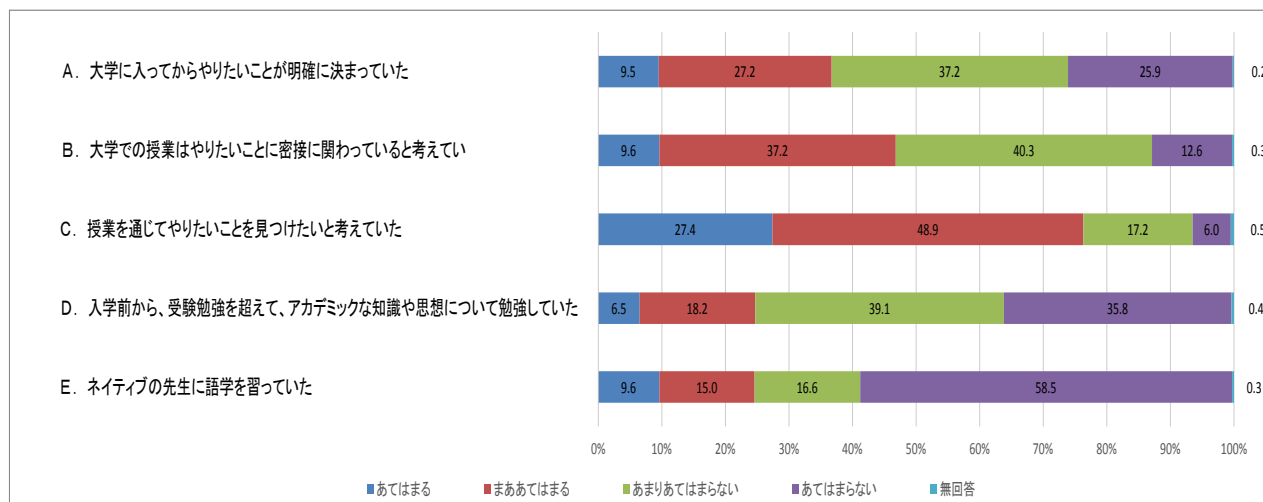
Q 7 出身高校等



回答者のうち、過半数（54.7%）は私立高校出身で、次いで公立高校が34.4%、国立高校が8.5%となっている。また、外国の学校は1.5%となっている。

入学時：やりたいことが明確：約4割、授業を通じて見つけたい：約4分の3

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

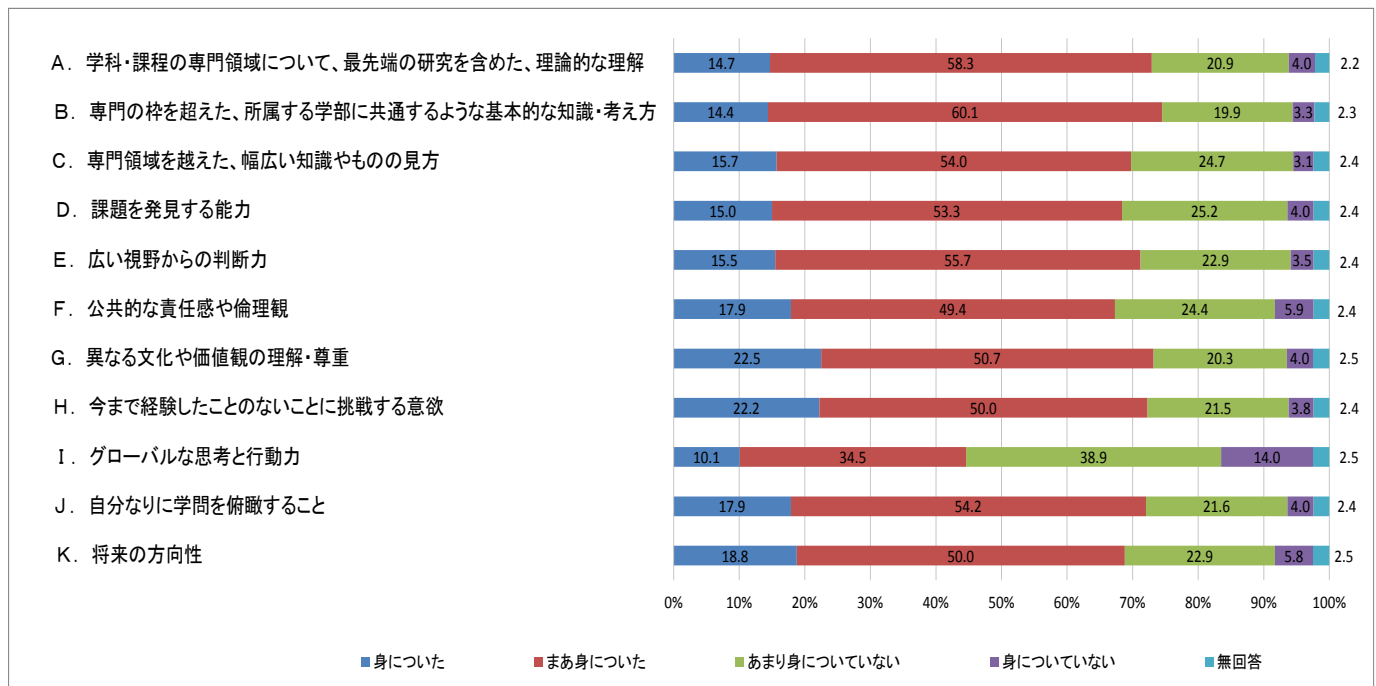


「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」9.5%と「まああてはまる」27.2%を合わせて36.7%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」（46.8%）者はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つげたいと考えていた」が4分の3（76.3%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である late specialization に沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（24.7%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（24.6%）と、入学以前に受験以外の学習をしていた者は、4分の1未満となっている。

「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は2008年度は「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であったが、やや減少傾向にあり2014年度は36.7%となっている。同じように、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は2008年度は「あてはまる」6.3%、「まああてはまる」19.4%で合わせて25.7%であったが、やや減少傾向にあり2013年度は23.5%となっていた。しかし、2014年度はやや増加して24.7%となっている。こうした時系列の変化については、後に詳細に検討する。その他の項目について、こうした時系列の変化に傾向性がない。以下では、とくに目立った傾向がないものについては、特に記載しない。

身に付けた能力：「学部に通じる基本的な知識・考え方」、「学問を俯瞰すること」、「最先端の理論的理解」、「幅広い知識やものの見方」、「異なる文化や価値観の理解・尊重」、「今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」、「広い視野からの判断力」を身につけた者は7割前後、「グローバルな思考と行動力」は4割強

Q 9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

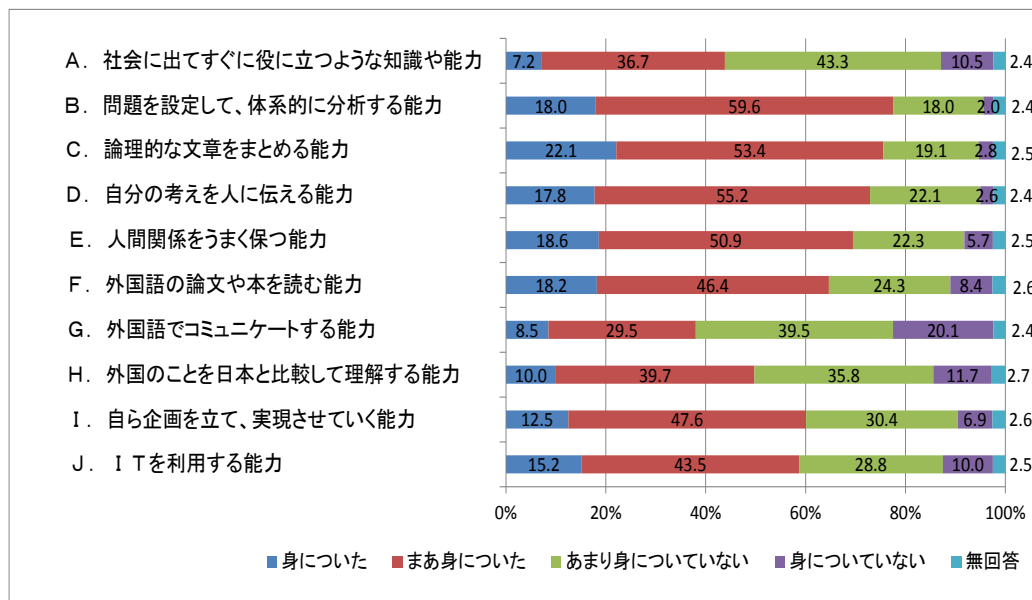


東京大学の教育を通じて身につけた能力では、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通じるような基本的な知識・考え方」（「身についた」14.4%と「まあ身についた」60.1%で合わせて74.5%、以下同じ）、「J. 自分なりに学問を俯瞰すること」（72.1%）、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的な理解」（73.0%）、「C. 専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」（69.7%）、を身につけた者は7割前後となっている。これらは毎年度ほとんど変化していない。

2013年度より学部教育の総合的改革の中で育成する能力・人材に関わる、次のような項目をたずねている。以下、2014年度について「身についた」とする者の高い割合を見ると、「G. 異なる文化や価値観の理解・尊重」（「身についた」22.5%と「まあ身についた」50.7%を合わせて73.2%）、「H. 今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」（「身についた」22.2%と「まあ身についた」50.0%を合わせて72.2%）、「E. 広い視野からの判断力」（「身についた」15.5%と「まあ身についた」55.7%を合わせて71.2%）は7割をこえている。次いで、「D. 課題を発見する能力」（「身についた」15.0%と「まあ身についた」53.3%を合わせて68.3%）と「F. 公共的な責任感や倫理観」（「身についた」17.9%と「まあ身についた」49.4%を合わせて67.3%）は3分の2以上となっている。これに対して、「I. グローバルな思考と行動力」（「身についた」10.1%と「まあ身についた」34.5%を合わせて44.6%）については、身についたとする者は半数以下となっている。

「外国語の論文や本を読む能力」が身についた者は6割以上、「外国のことを日本と比較して理解する能力」は半数、「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は約3分の1

Q 10. あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。



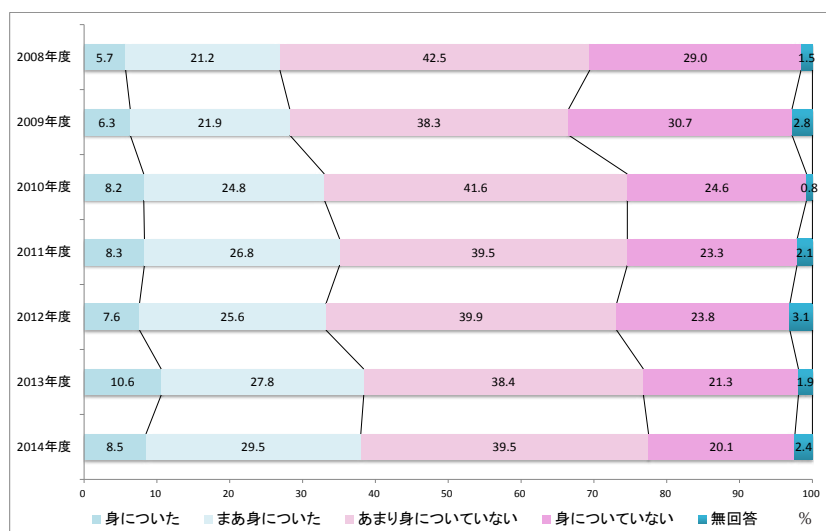
学生が大学時代を通じて身につけたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」(「身についた」と「まあ身についた」を合わせて77.6%、以下同じ)、「C. 論理的な文章をまとめる能力」(75.5%)、「D. 自分の考えを人に伝える能力」(73.0%)、「E. 人間関係をうまく

保つ能力」(69.5%)といった汎用性の高い一般的な能力である。

これに対して、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている者は約4割(43.9%)に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は約6割(64.6%)の者が身についたとしているのに対して、「H. 外国のことを日本と比較して理解する能力」は半数(49.7%)、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についたとしている者は約3分の1(38.0%)に過ぎない。

「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は少しずつ増加

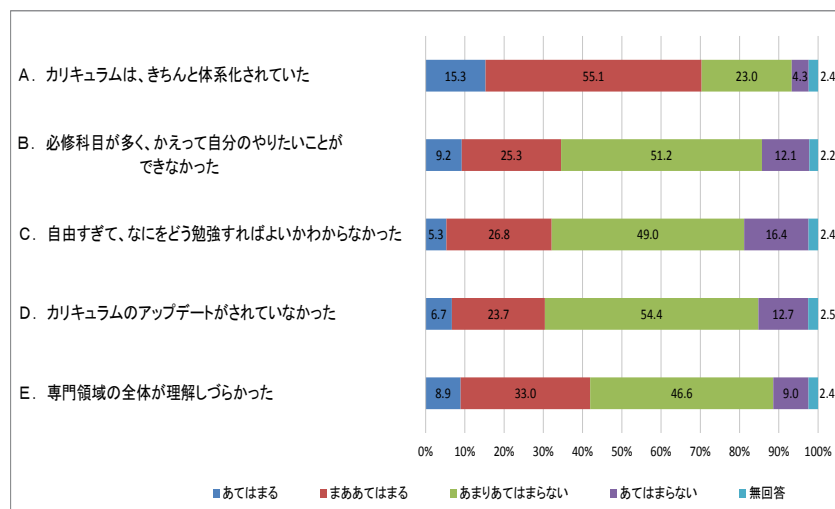
「Q10 G. 外国語でコミュニケーションする能力」の推移



とくに、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、年度によって増減はあるものの、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。とくに「身についた」者のみの割合は2008年度の5.7%から2013年度は10.6%と、2008年度に比較して約2倍増加している。しかし、2014年度は、8.5%とわずかではあるが、再び減少に転じている。(時系列の傾向については後述)。

カリキュラムについては肯定的な回答が約7割だが、約3割の者は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という者は約4割

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



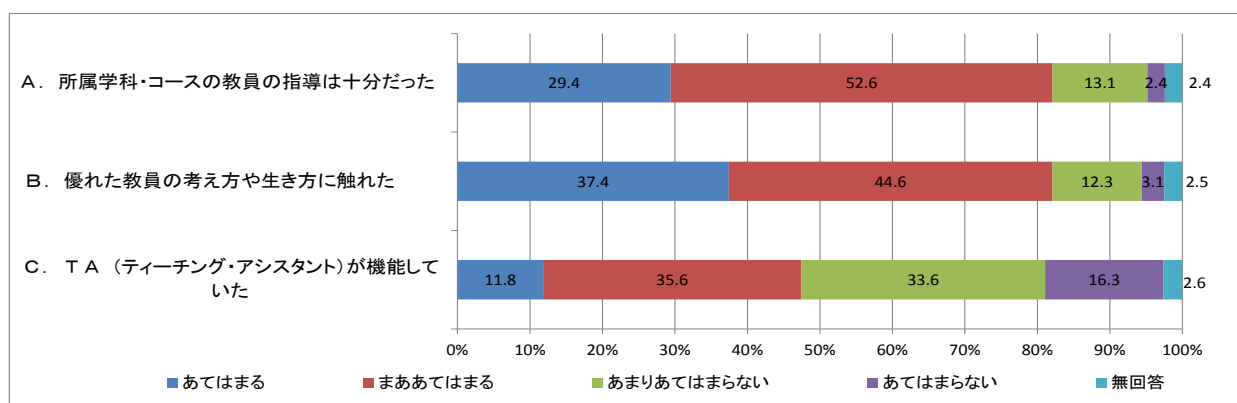
カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする者が、70.4%（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）と7割となっている。他方、「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」（34.5%）、「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」（32.1%）「D.

カリキュラムのアップデートがされていなかった」（30.4%）、という否定的な項目については、約3割であり、全体として約7割の者は肯定的に評価している。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」という者も約4割（41.9%）となっている。

とくに「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」者の割合は年々増加傾向にあったが、2013年度の37.1%に対して2014年度は34.5%とやや減少傾向にある。

8割の者が「教員の指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

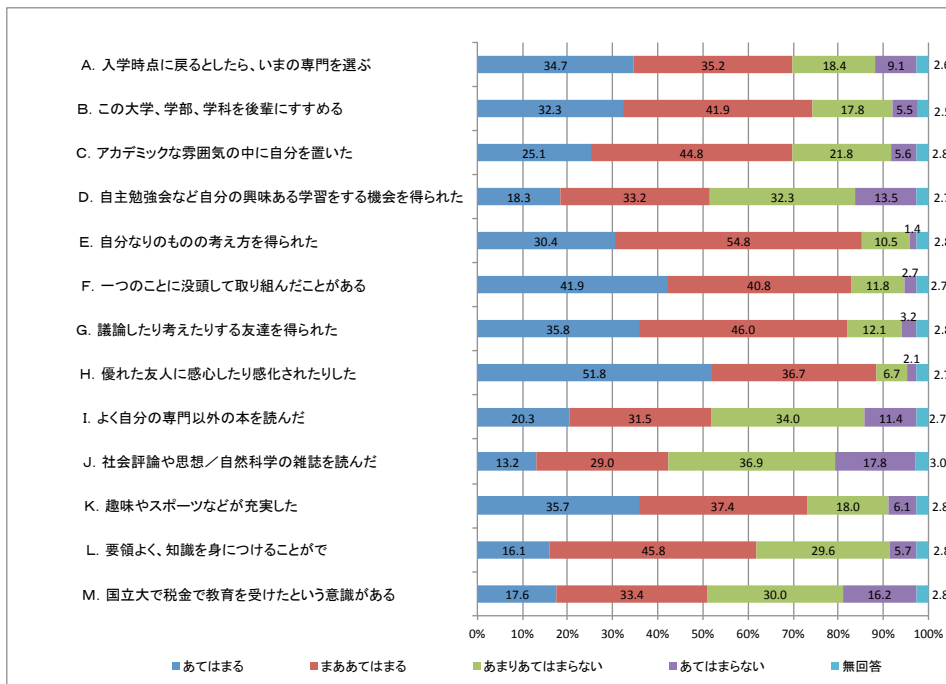
Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」（82.0%、「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）と「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」（82.0%）が8割となっている。反面、「C. TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」と評価するのは47.4%と半数以下となっている。しかし、「C.TAが機能していた」を除く項目は、わずかではあるが増加傾向にある。

「友人から感化」:約9割、「自分なりのものの考え方の習得」、「一つのことに没頭」、 「議論する友人を得られた」:約8割

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、次のようなことはどの程度あてはまりますか。

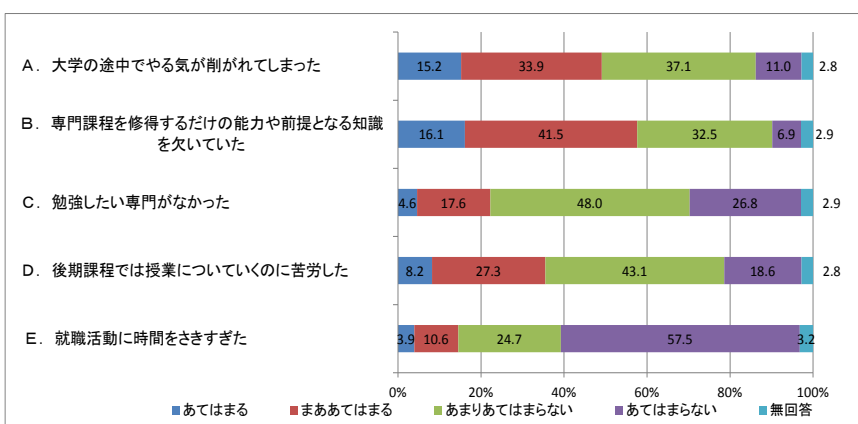


大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」（「あてはまる」51.8%と「まああてはまる」36.7%で合わせて88.5%、以下同じ）、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」（85.2%）、「F. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」（82.7%）、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」（81.8%）で、8割を超えている。これに対して、「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」（74.2%）と「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの

専門を選ぶ」（69.9%）はやや低くなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」（51.8%）は約半数、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」（42.2%）者の割合は、約4割である。他方、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」（51.0%）という者も約半数になっている。とくに、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」、「G. 議論したり考えたりする友達を得られた」、「H. 優れた友人に感心したり感化されたりした」、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」、「J. 社会評論や思想／自然科学の雑誌を読んだ」は、年々わずかではあるが減少傾向にある。

半数の者が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」

Q14 あなたは、大学時代に次のような経験がありましたか。

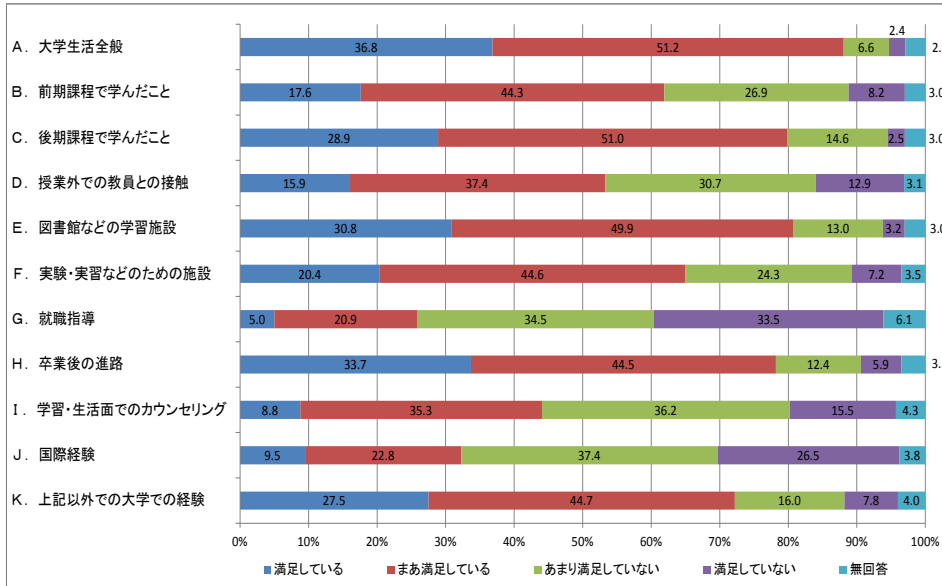


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」（「あてはまる」16.1%と「まああてはまる」41.5%で合わせて57.6%、以下同じ）で、約6割があてはまるとしている。また、「A. 大学の途中で

やる気が削がれてしまった」（49.1%）者も半数になっている。なお、「E. 就職活動に時間をさきすぎた」（14.5%）については、4月からの予定（Q26）を「働く」（後述）とした者に限ると25.4%となる（グラフ省略）。また、「B. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」は年々増加傾向にあったが、2013年度よりやや減少している。

満足度：「大学生活全般」約9割、「前期課程」約6割、「後期課程」8割 「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」については約8割が満足

Q15 あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きします。



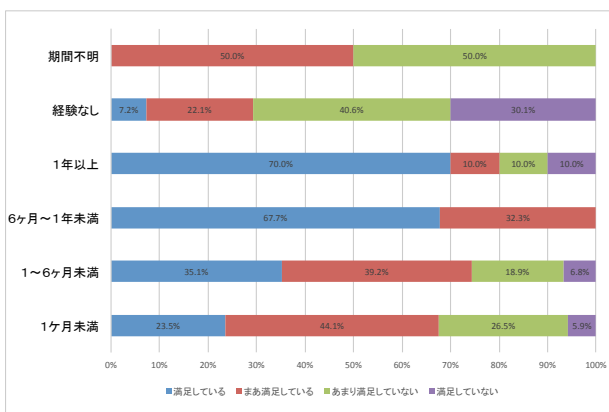
「A. 大学生活全般」に満足している者は88.0%（「満足している」36.8%と「まあ満足している」51.2%を合わせた回答、以下同じ）と9割に近い。「B. 前期課程で学んだこと」（61.9%）は約6割、「C. 後期課程で学んだこと」（79.9%）は8割、「H. 卒業後の進路」（78.2%）は約8割が満足している。

これに対して、満足度が低いのは、「G. 就職指導」（25.9%）で4分の1の者しか満足していない。とくに、卒業後の予定（Q26、後述）について、大学院等への進学予定者は「E. 実験・実習のための施設」以外はやや低くなっている。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」（44.1%）も4割強の者しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」（53.3%）についても、満足している者は約半数に過ぎない。さらに、「J. 国際経験」の満足度は、約3分の1（32.3%）に過ぎない。なお、「E. 図書館などの学習施設」の満足度は年々減少傾向にある。

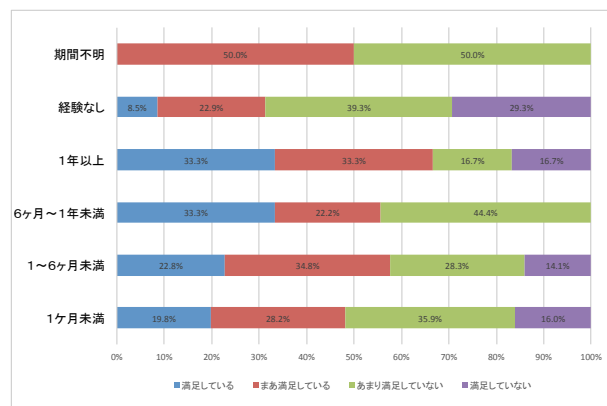
これに対して、満足度が

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

「Q 21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q 15 J. 国際経験」の満足度



「Q 21 B. 個人留学した（語学学習）」と「Q 15 J. 国際経験」の満足度

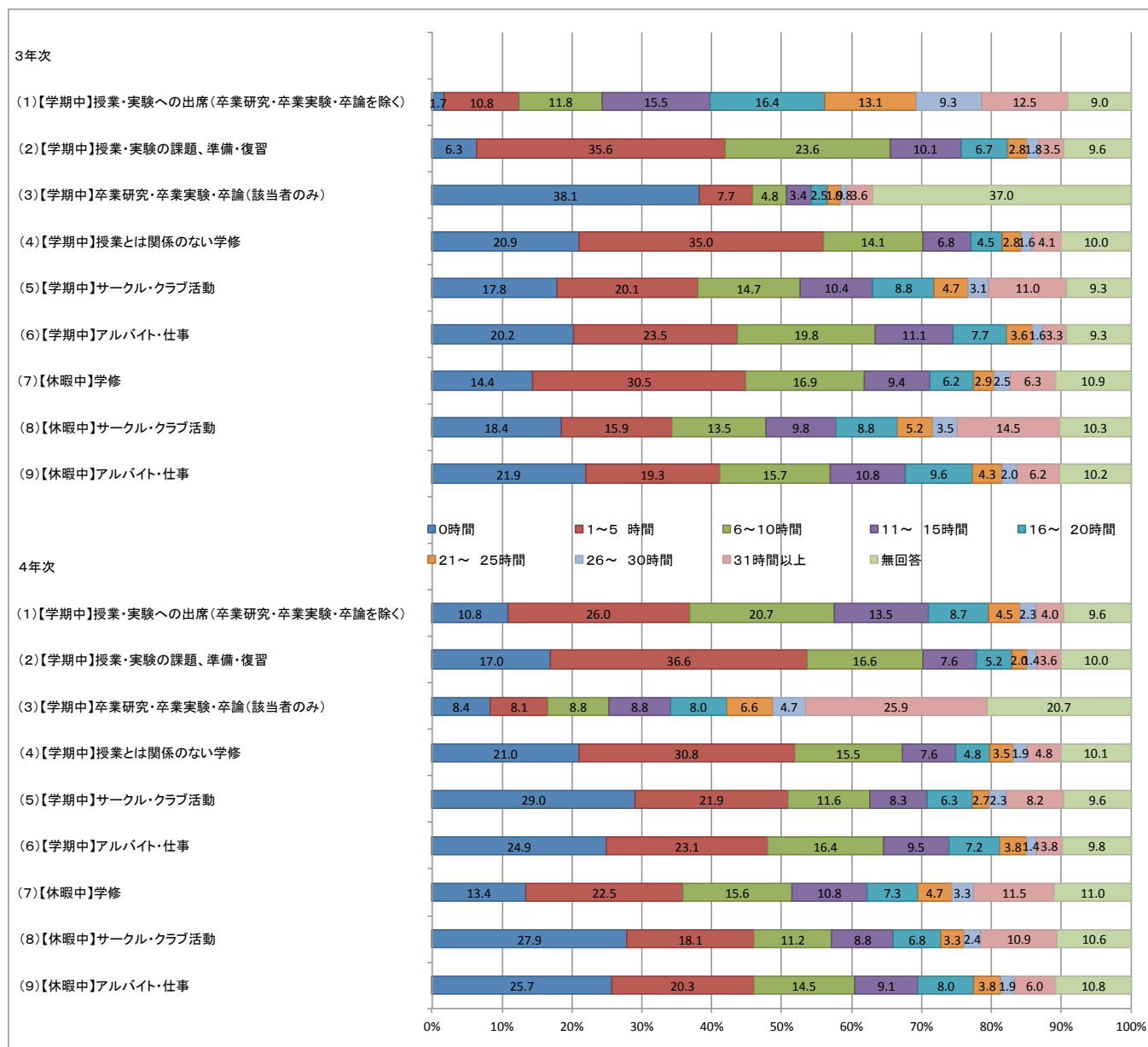


左の図は、後述の「Q21 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q15 J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高まっている。また、留学経験の長い者ほど満足度は高い。右の図は、同じように、「Q21B. 個人留学した（語学学習）」と「Q15J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、個人留学の国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高い。留学経験の長い者ほど満足度は高くなっている。

3年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が6割

4年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「0から5時間」が約半数、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が4分の1

Q16 典型的な1週間(土、日を含む)の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、3年次と4年次について、(1)から(9)までそれぞれ1~8のどれか1つに○をつけてください。



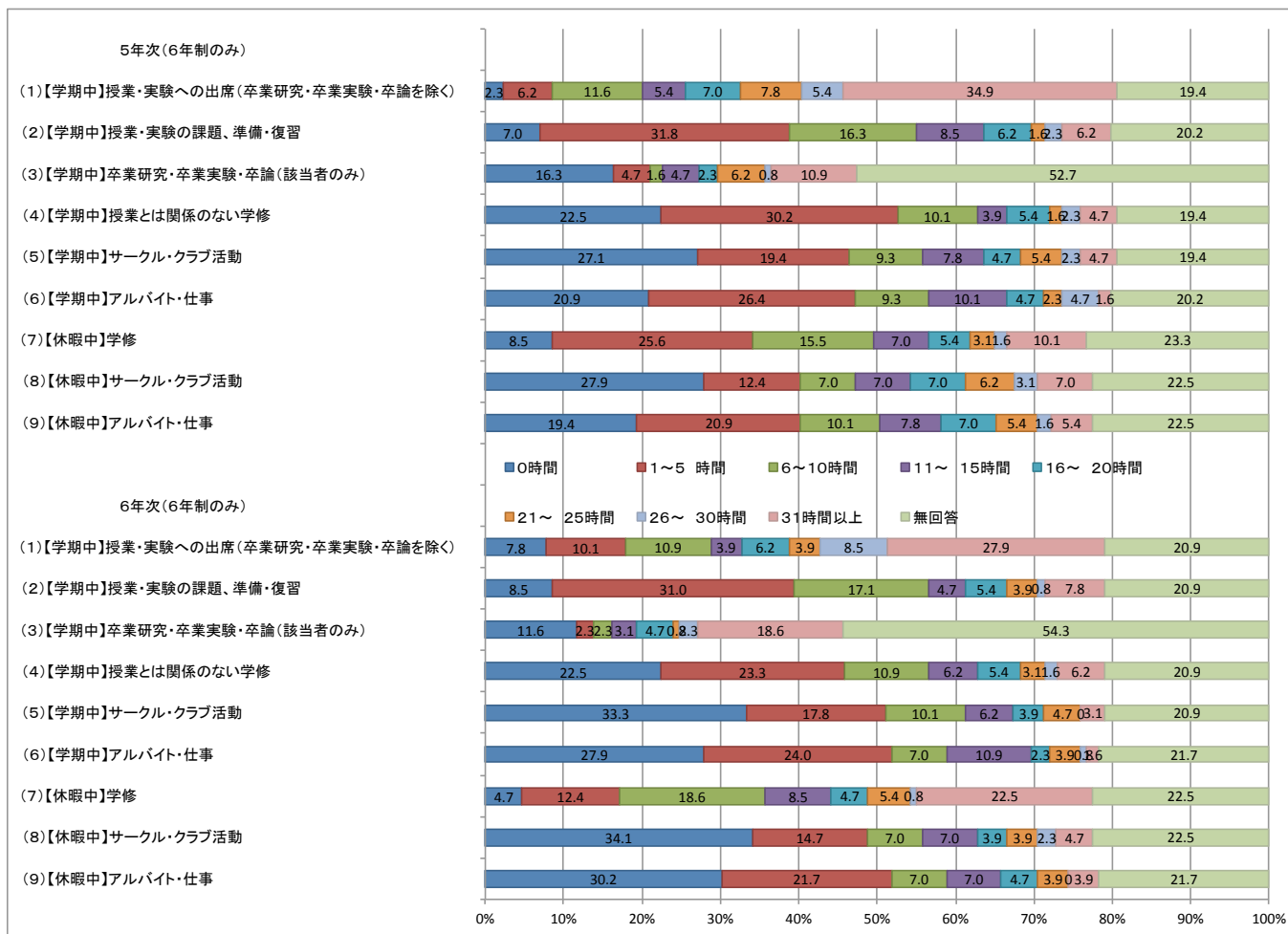
生活時間については、典型的な1週間(土日を含む)の時間数を学期中と休暇中についてそれぞれ3年次と4年次についてたずねた。3年次には「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が6割(59.2%)だが、4年次では「0から5時間」が約半数(53.6%)となっている。4年次では、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が4分の1(25.9%)と最も高い割合を占めている。また、「授業とは関係のない学修」が「0時間」が3年次は20.9%、4年次でも21.0%となっている。

6年制課程

5年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が5割

6年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「0から5時間」が4割

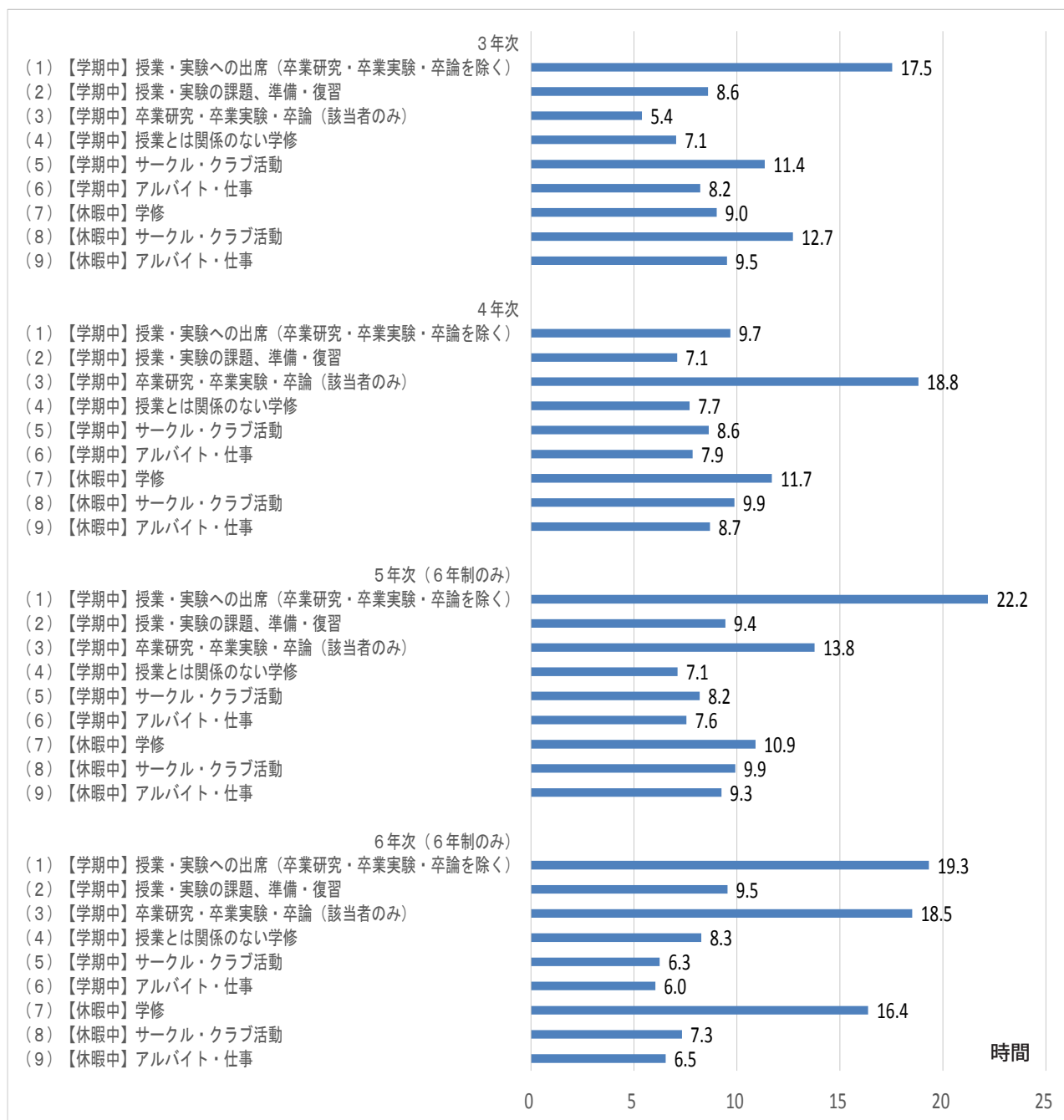
Q16 典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、3年次と4年次について、(1)から(9)までそれぞれ1~8のどれか1つに○をつけてください。



6年制課程（医学科、獣医学課程、薬学科）については、5, 6年次についてのみたずねた。5年次には「授業・実験の課題、準備・復習」は「1から10時間」が約5割（48.1%）だが、「授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」も34.9%と3分の1以上になっている。また、「授業とは関係のない学修」が「0時間」も22.5%となっている。6年次では「授業・実験の課題、準備・復習」は「0から5時間」が4割（39.5%）となっているが、「授業・実験への出席（卒業研究・卒業実験・卒論を除く）」の「31時間以上」も27.9%と4分の1以上となっている。6年次では、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が18.6%と最も高い割合を占めている。また、「授業とは関係のない学修」が「0時間」も22.5%となっている。

3年次：「授業」18時間、「予習復習」9時間、「卒研卒論」5時間「授業外の学習」7時間

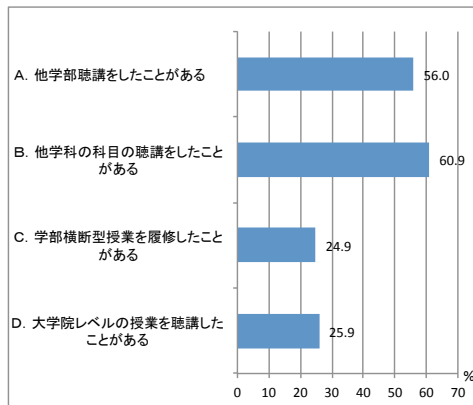
4年次：「授業」10時間、「予習復習」7時間、「卒研卒論」19時間「授業外の学習」8時間



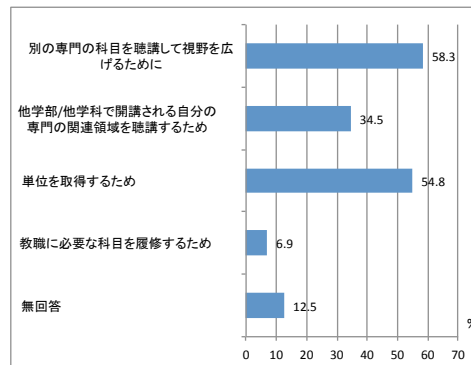
生活時間の回答のそれぞれの中位値 (たとえば、「1 から 5 時間」では 3 時間) を取り、平均を算出した。なお、「31 時間以上」は 31 時間として算出した。このため、やや過小推計になっている。学期中の時間数の平均で見ると、「授業の出席 (卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」は、3年次で 17.5 時間、4年次には 9.7 時間となっている。「授業・実験の課題、準備、復習」は、3年次で 8.6 時間、4年次には 7.1 時間となっている。「卒業研究・卒業実験・卒論 (該当者のみ)」は、3年次で 5.4 時間、4年次には 18.8 時間となっている。また、「授業とは関係のない学習」については、3年次で 7.1 時間、4年次で 7.7 時間となっている。単純に合計すると、学修時間は、3年次で、38.6 時間、4年次で 43.3 時間となっている。6年制の 5年次と 6年次も、4年制の 3年次と 4年次と同じような傾向がみられるが、いずれもやや時間が長くなっている。

「他学部聴講」の経験者は過半数、「視野を広げる」ための聴講が約6割

Q17 他学部聴講などについてお聞きします。



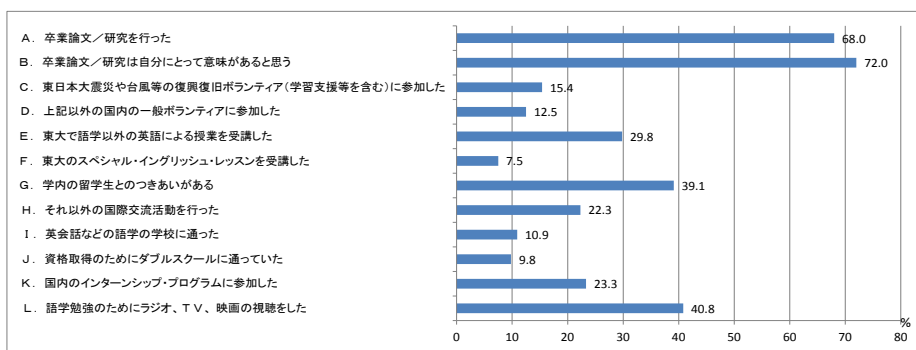
SQ 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか



「A. 他学部聴講をしたことがある」者は、半数以上(56.0%)となっている。「C. 学部横断型授業を履修したことがある」(24.9%)と「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」(25.9%)は4分の1となっている。ただし、「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」を除いて、わずかに減少傾向にある。「他学部・他学科聴講」の意図は、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」が58.3%と最も高い割合となっているが、「単位を取得するため」も54.8%と高くなっている。

「卒業論文は意味がある」「卒業論文／研究を行った」：約7割、「留学生とのつきあい」：約4割、「東日本大震災ボランティア」：1割半

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

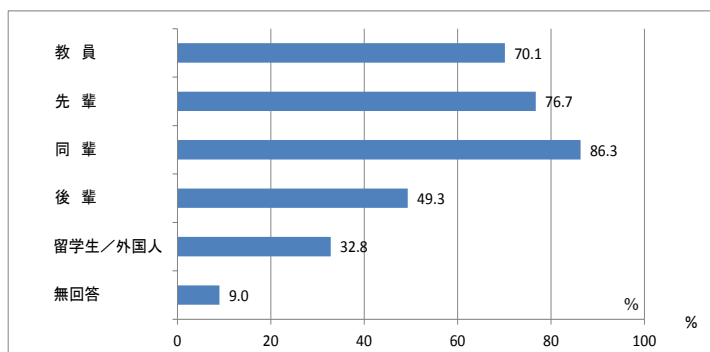


在学時の学習機会・経験として高く評価されているのは「B. 卒業論文／研究は自分にとって意味があると思う」(72.0%)と「A. 卒業論文／研究を行った」(68.0%)で7割前後になっている。また、「G. 学内の

留学生とのつきあいがある」は39.1%、「K. 国内のインターンシップ・プログラムに参加した」は23.3%、「C. 東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」は15.4%となっている。ボランティアやインターンはやや増加する傾向にある。

「教員との学問的交流」約7割、「同輩」約8割半、「先輩」約4分の3、「後輩」約5割

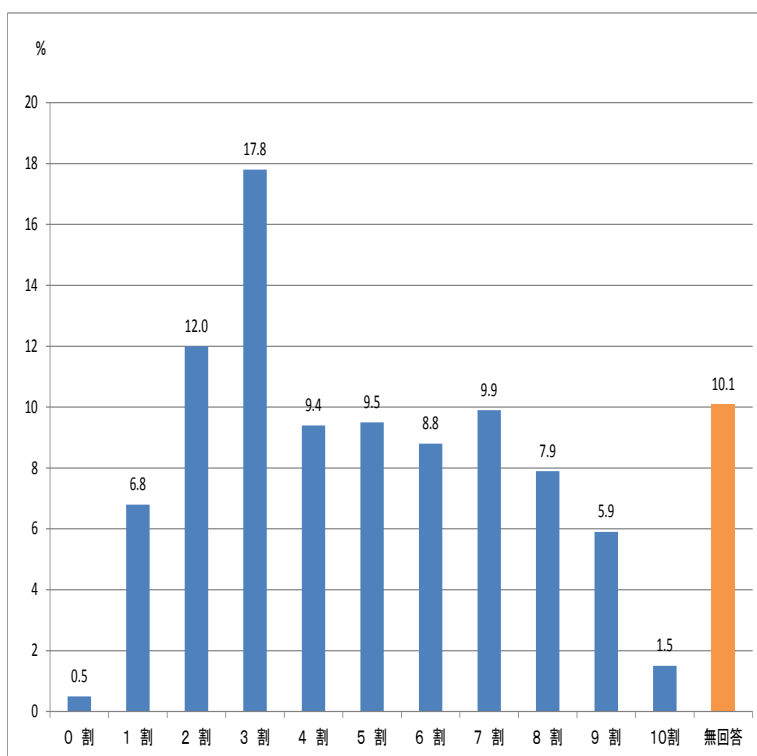
Q19 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。



最も学問的な交流があったのは、「同輩」で約8割半(86.3%)、次いで「先輩」が約4分の3(76.7%)、「教員」が7割(70.1%)となっており、「後輩」は半数(49.3%)、「留学生／外国人」は約3分の1(32.8%)にとどまっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで7割と5割

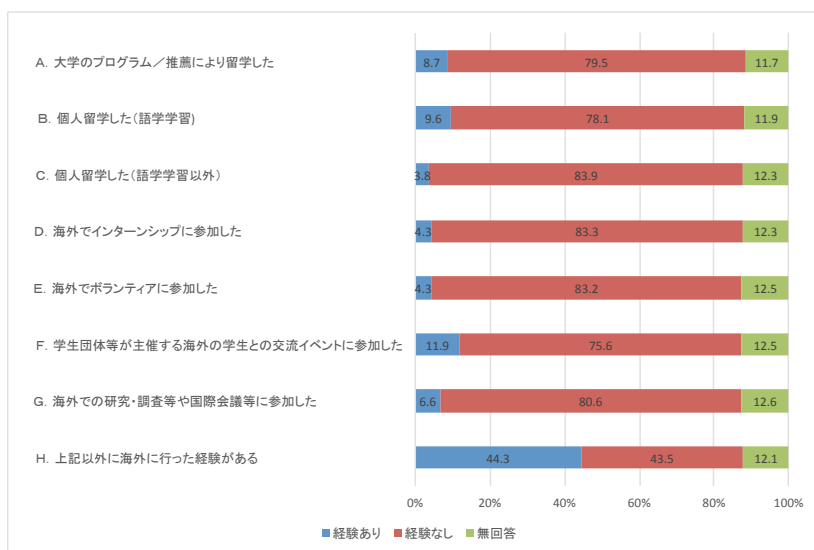
Q20 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください。「優上」や「秀」などの優以上を含めた割合をお答えください。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が17.8%と最も多く、次いで「7割」が9.9%、「5割」が9.5%となっており、対称ではなく、右に歪んだ分布になっている。「4割」と「6割」もそれぞれ9.4%と8.8%とやや高い割合を占め、平均では、4.7割となっている。

「国際交流経験」:「学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」と「個人留学(語学学習)」が約1割、「大学のプログラム/推薦により留学」は8.7%

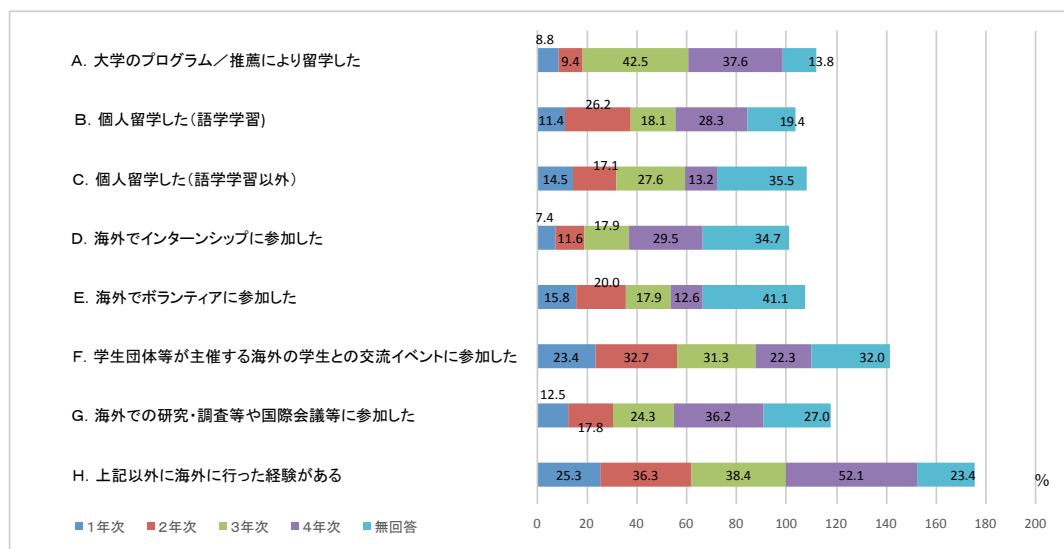
Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



在学時の国際交流経験で、最も高い割合を示すのは、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」11.9%で、次に「B. 個人留学した(語学学習)」は9.6%、「A. 大学のプログラム/推薦により留学した」8.7%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は6.6%の順である。これに対して、「D. 海外でインターンシップに参加した」は4.3%、「E. 海外でボランティアに参加した」は

4.3%、「C. 個人留学した(語学学習以外)」は3.8%、と経験者の割合は低い。これに対して、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は44.3%と4割以上になっている。

「国際交流経験」の時期：学年をあげるにつれて増加する傾向、「大学のプログラム／推薦により留学」、「個人留学（語学学習以外）」は3年次、「学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」、「海外ボランティア」は2年次が最も高い割合

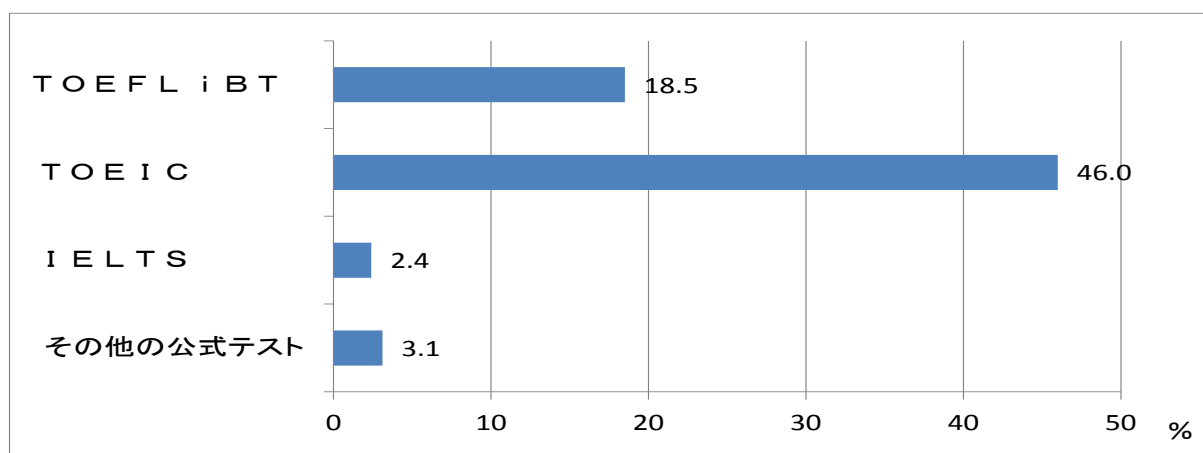


前問(Q21)の国際交流経験について、経験者に何年次に経験をしたかをたずねた。図は4年制の場合で、複数回答のため、合計は100%を超えている。国際活動の時期は、1年次は少なく、学年が上がるに従って割合が高くなる傾向が見られる。しかし、「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」、「C. 個人留学した（語学学習以外）」は3年次、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」、「E. 海外でボランティアに参加した」は2年次が最も高い割合となっている。

なお、6年制の場合には、「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」は5年次に集中しているが、それ以外の項目は5年次あるいは6年次がそれぞれ高い割合となっている（グラフ省略）。

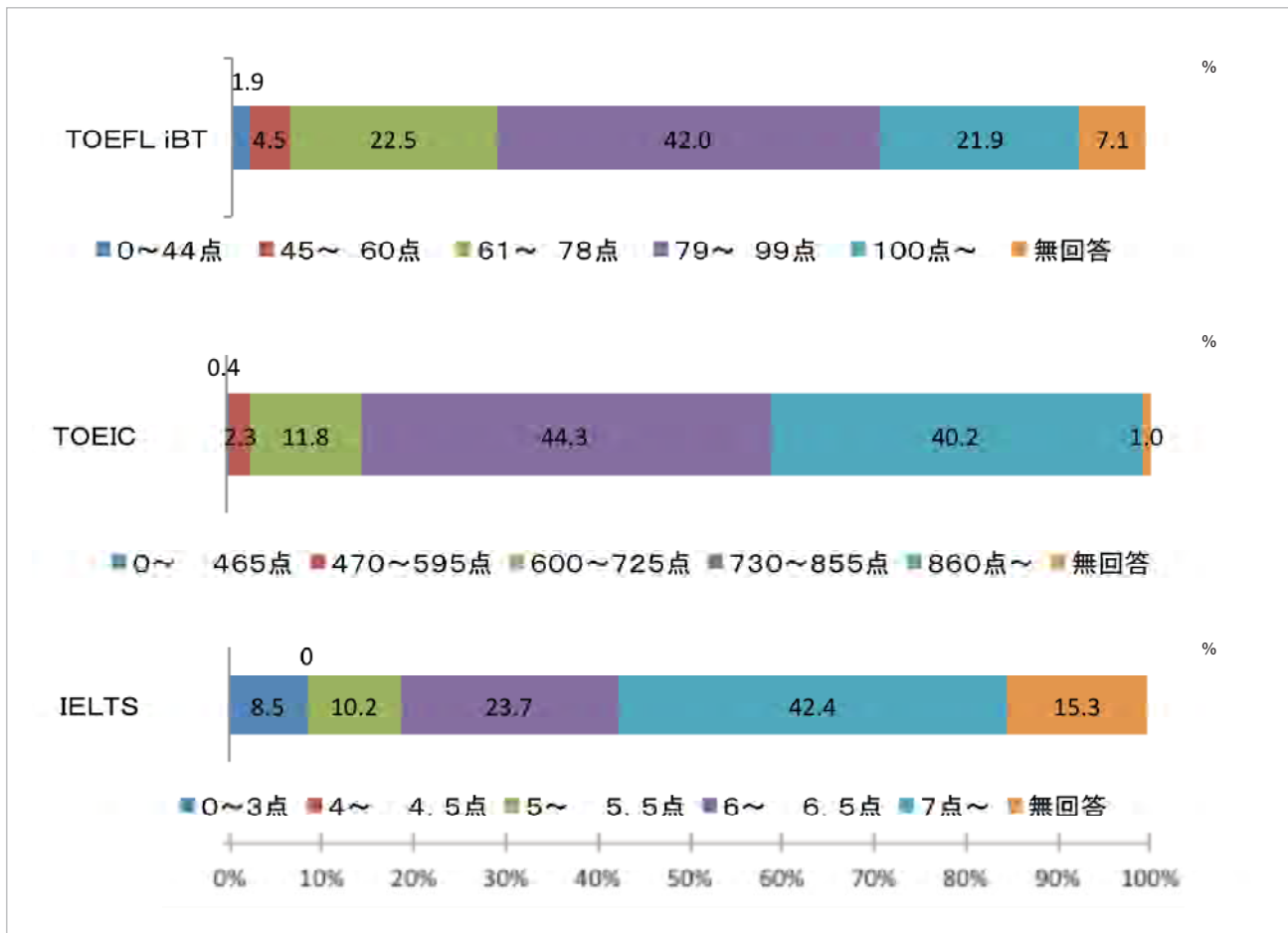
「TOEFL iBT 受験者」は約2割、「TOEIC 受験者」は半数近い

Q22 あなたは、在学中に TOEFL や TOEIC 等の公式テストを受験したことがありますか。



TOEFL iBT の受験者は 18.5% (2013 年度 19.0%, 以下同じ)、TOEIC 受験者は 46.0% (48.7%)、IELTS 受験者は 2.4% (1.6%)、その他の試験は 3.1% (3.9%) となっている。IELTS を除いて、やや減少傾向にある。

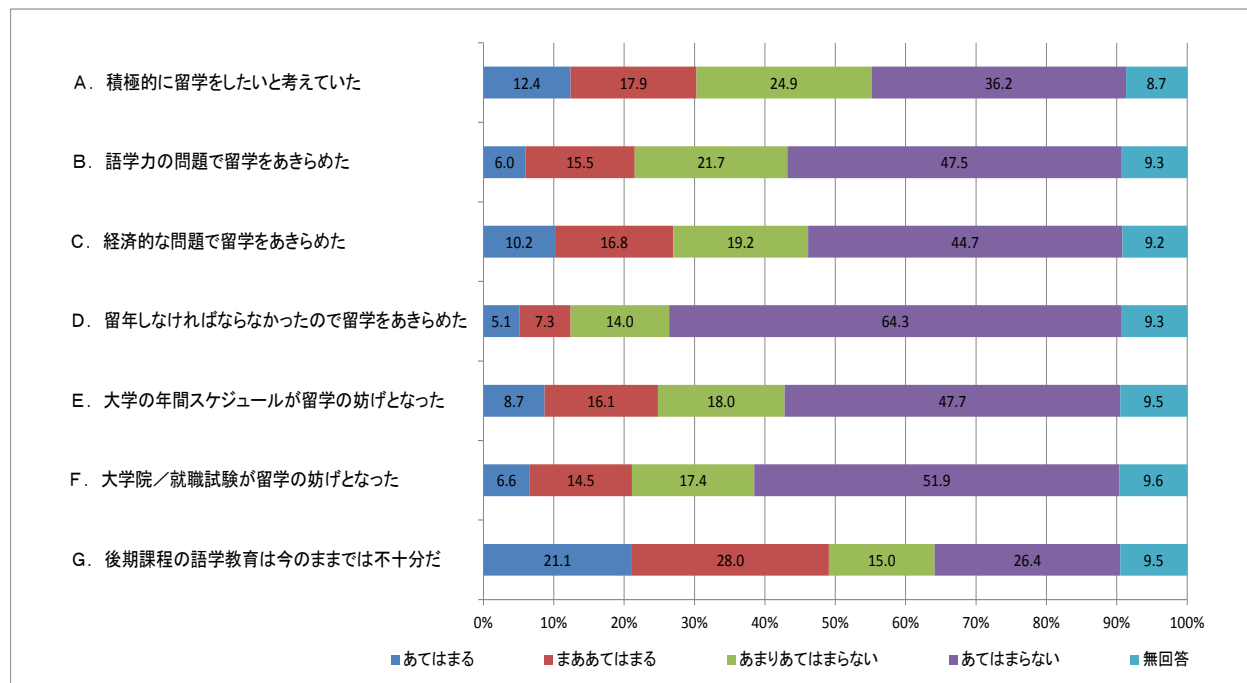
TOEFL iBT は「79 から 99 点」、TOEIC は、「730 ～ 855 点」、IELTS は「7 点以上」が最も高い割合



それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、TOEFL iBTは「79～99点」（42.0%）、TOEICは、「730～855点」（44.3%）、IELTSは「7点以上」（42.4%）が最も高い割合となっている。なお、TOEICは2013年度では「860点以上」（42.9%）が最も高い割合であったが、2014年度は40.2%とやや低くなっている。

「留学への障害」は「経済的な問題」、「大学の年間スケジュール」、「語学力」、「大学院／就職試験」の順で、いずれも減少傾向

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

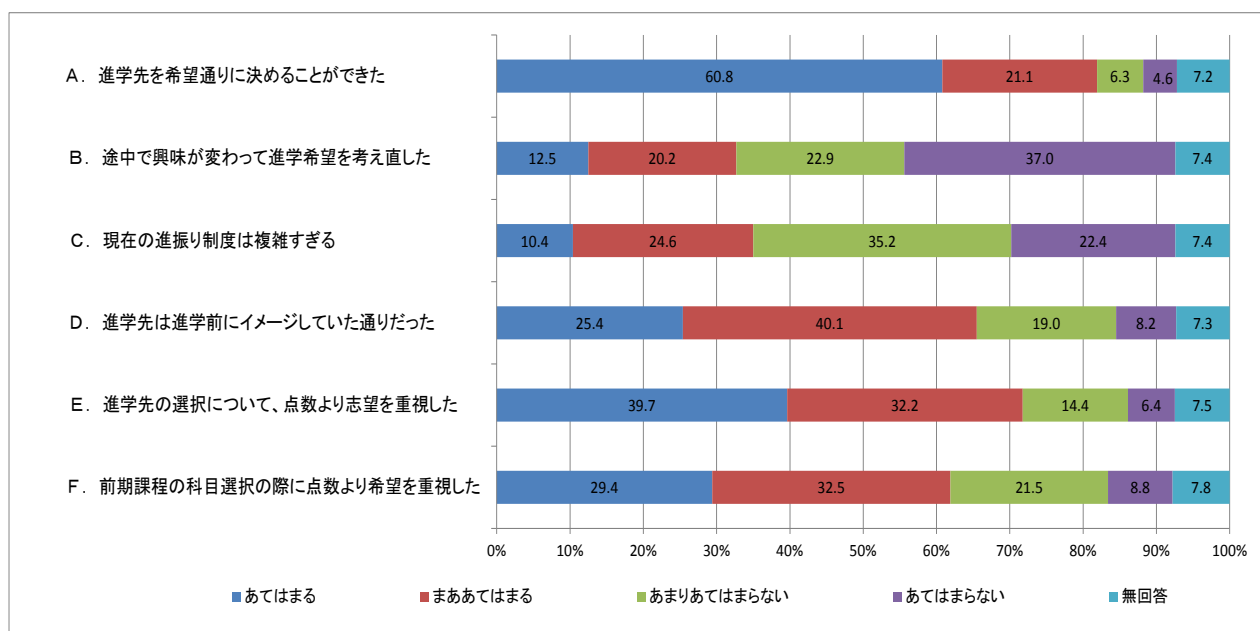


「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」者は、約2割（「あてはまる」6.0%と「まああてはまる」15.5%を合わせて21.5%、以下同じ）であるが、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」者は、約3割（27.0%）である。また「E. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」者は24.8%で2012年度の34.8%、2013年度の26.7%より減少傾向にある。「F. 大学院／就職試験が留学の妨げとなった」も同様に21.1%と2012年度の28.5%、2013年度の21.6%より減少している。さらに、「G. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者は、49.1%で、2011年度の64.4%、2012年度の56.5%、2013年度の52.1%より減少する傾向にある。これに対して、「A. 積極的に留学したいと考えていた」者は、多少増減があるものの2014年度には「あてはまる」12.4%、「まああてはまる」17.9%で合わせて30.3%と2010年度の35.6%、2013年度の31.7%からやや減少傾向にある。また、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」、「D. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」、「E. 大学院／就職試験が留学の妨げとなった」は年々減少傾向にある。

昨年度初めて調査した「D. 留年しなければならなかったため留学をあきらめた」は「あてはまる」5.1%と「まああてはまる」7.3%を合わせて12.4%（2013年度13.5%）となっている。

「進学先」は「希望通り」：8割以上、「進学希望を考え直した」：約3分の1

Q24 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。



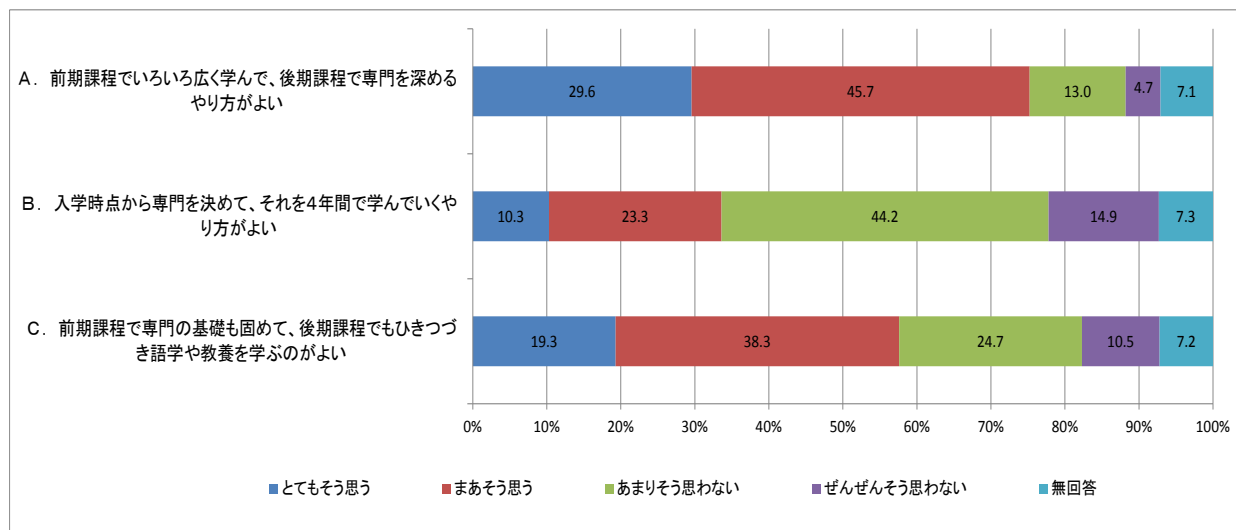
「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、81.9%（「あてはまる」60.8%と「まああてはまる」21.1%を合わせて、以下同じ）8割をこえている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も約3分の1（32.7%）となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、65.5%で約3分の2だが、「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」は35.0%で約3分の1の者が複雑すぎるとしている。「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」は、約7割（71.9%）となっている。「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」は6割（61.9%）である。

「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は87.6%で2013年度には83.5%、2014年度81.9%とやや減少傾向にある。また、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2008年度には36.6%で、2013年度は32.5%、2014年度32.7%となっている。

「G. 全科類枠で進学した」で進学した者の割合は、8.1%となっている（グラフ省略）。

「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」現行方式を評価する者が4分の3だが、「後期課程でも語学や教養を学ぶのがよい」という者も約6割

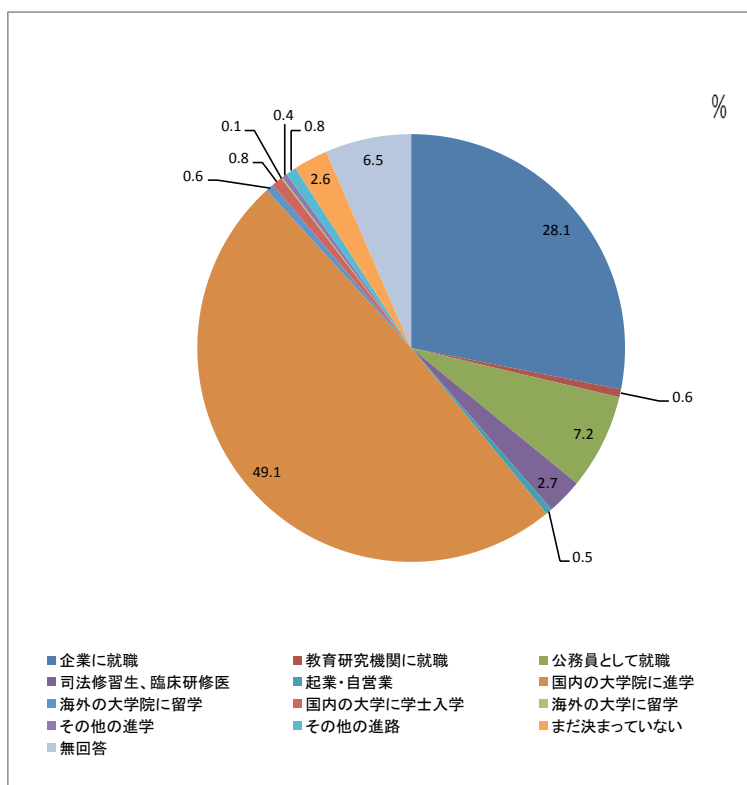
Q25 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。



「専門と教養の学習の仕方について」では、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する者が、「とてもそう思う」29.6%と「まあそう思う」45.7%を合わせて4分の3（75.3%）で、これに対して、逆に、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する者は3分の1（33.6%）となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする者も57.6%と約6割となっている。

「卒業後の予定」：「進学」が半数以上、「就職」が約4割

Q26 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。あてはまる番号一つに○をつけてください。



働く

1. 企業に就職 (28.1%)
2. 教育研究機関に就職 (0.6%)
3. 公務員として就職 (7.2%)
4. 司法修習生、臨床研修医 (2.7%)
5. 起業・自営業 (0.5%)

学ぶ

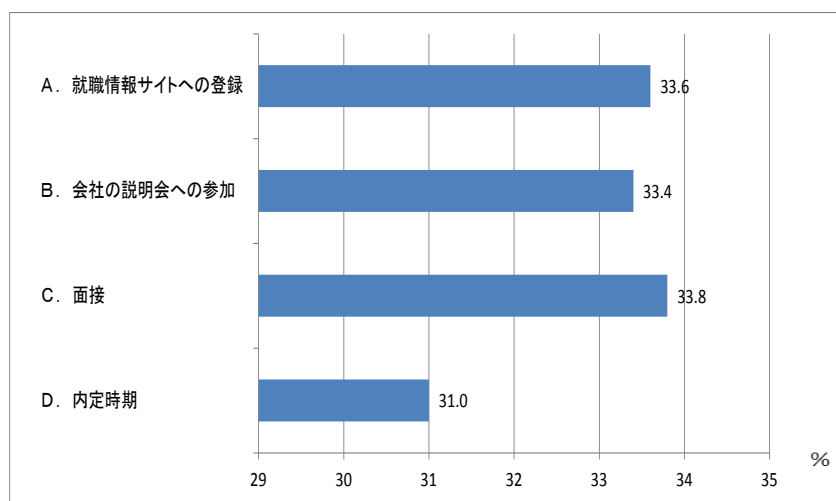
6. 国内の大学院に進学 (49.1%)
7. 海外の大学院に留学 (0.6%)
8. 国内の大学に学士入学 (0.8%)
9. 海外の大学に留学 (0.1%)
10. その他の進学 (0.4%)
11. その他の進路 (0.8%)

未定

12. まだ決まっていない (2.6%)

4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が49.1%と最も多く、「海外の大学院に留学」(0.6%)と合わせて、大学院進学予定は、5割(49.7%)となっている。さらに、「国内の大学に学士入学」(0.8%)と「海外の大学に留学」(0.1%)と「その他の進学」(0.4%)を合わせて進学は51.0%と半数をこえている。これに対して、「企業に就職」は約3割(28.1%)で、「教育研究機関に就職」(0.6%)、「公務員として就職」(7.2%)、「司法修習生、臨床研修医」(2.7%)、「起業・自営業」(0.5%)と合わせて就職予定は、約4割(39.1%)となっている。進路未定は2.6%ときわめて少ない。

Q27 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては「C. 面接」が33.8%と最も高い割合を示しているが、以下、「A. 就職情報サイトへの登録」(33.6%)と「B. 会社の説明会への参加」(33.4%)がほぼ等しくなっている。また、「D. 内定時期」に関しては、31.0%が「内定」を受けている。なお、4月からの予定(Q26)を「働く」とした者に限ると92.7%が「内定」を受けている。

「民間企業への就職活動の時期」は3年生後期に集中

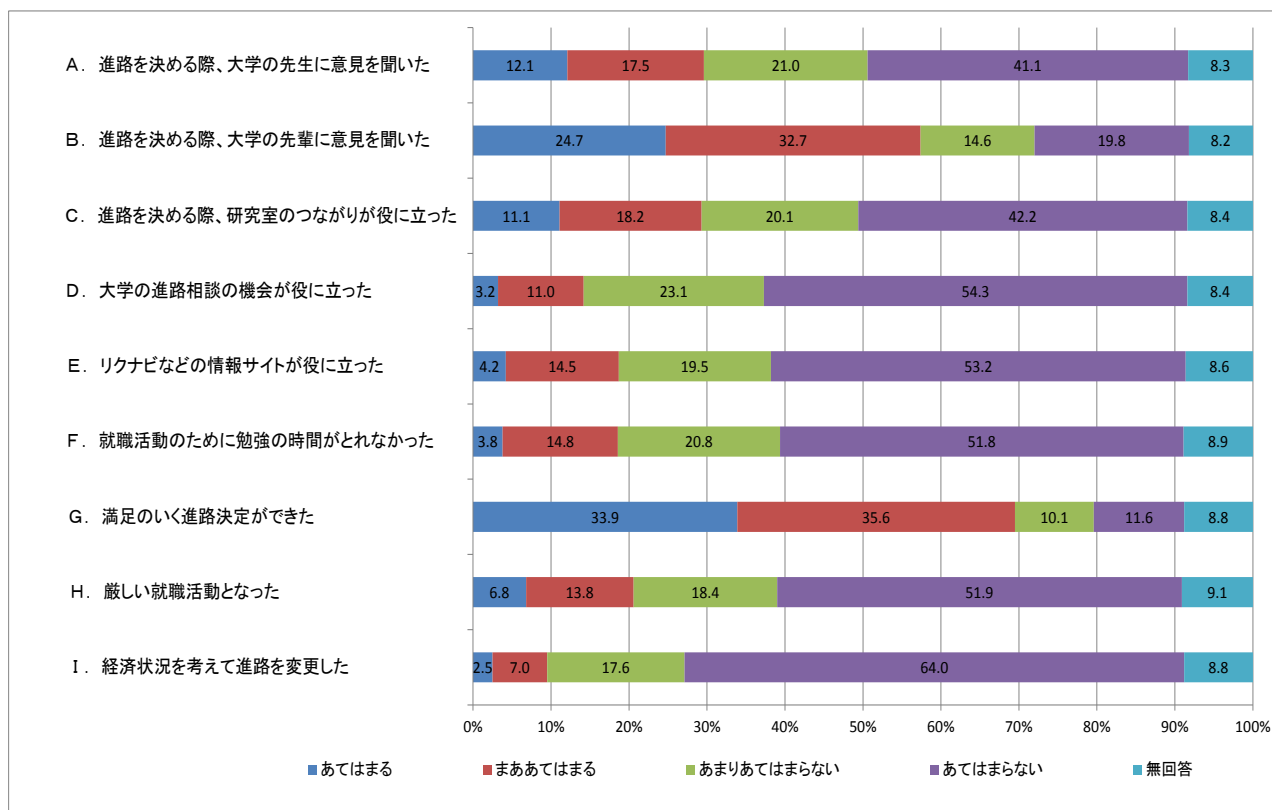
民間企業への就職活動の時期については、下表のように、3年生後期に集中しており、次いで3年生前期となっている。ただし、内定は4年生前期が66.1%と最も高い割合を占めている。

%

合計	1年生	2年生	3年生 前期 (4-9月)	3年生 後期 (10-翌3月)	4年生 前期 (4-9月)	4年生 後期 (10-翌3月)	5年生 前期 (4-9月)	5年生 後期 (10-翌3月)	6年生 前期 (4-9月)	6年生 後期 (10-翌3月)	年or月 不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	-	0.8	23.2	62.2	2.1	4.5	0.6	1.8	0.1	-	1.4	3.1
B. 会社の説明会への参加	-	0.2	10.7	74.5	2.3	5.6	0.6	1.8	-	-	0.7	3.5
C. 面接	0.1	0.1	11.6	35.1	39.1	5.5	1.3	0.8	1.5	0.1	1.2	3.4
D. 内定時期	-	-	6.6	12.3	66.1	6.5	2.1	0.6	2.1	0.8	0.8	2.2

「進路決定」: 「大学の先輩の意見」が約6割、7割の者が「満足のいく進路決定ができた」が「厳しい就職活動になった」も就職者の約4割

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「B. 先輩」(「あてはまる」24.7%と「まああてはまる」32.7%を合わせて57.4%、以下同じ)と6割近い。「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」(29.6%)と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」(29.3%)のは約3割で、「G. 満足 of いく進路決定ができた」(69.5%)のは7割となっている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」(18.6%)と「H. 厳しい就職活動となった」(20.6%)はともに約2割だが、4月からの予定(Q26)を「働く」とした者に限ると、それぞれ36.9%と39.1%と4割近くになる(グラフは省略)。また、「I. 経済状況を考えて進路を変更した」は2013年度の8.7%から2014年度は9.5%と増加している。

7回の調査で変化が見られる項目

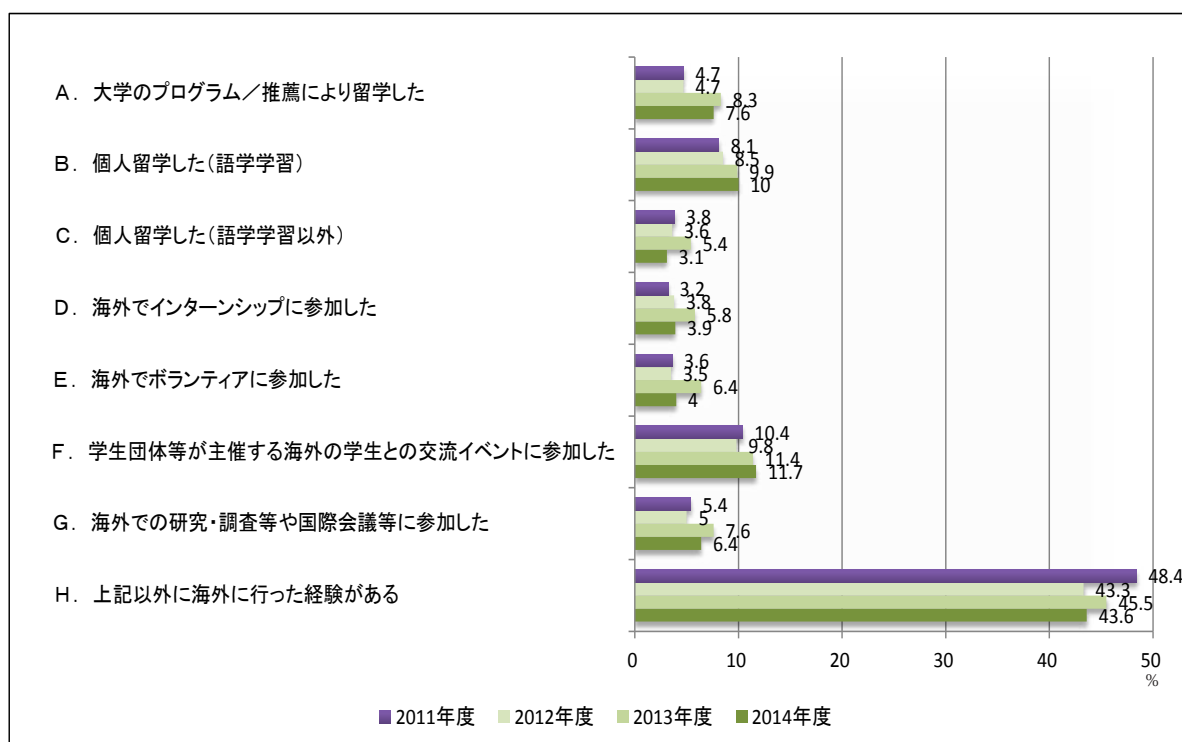
達成度調査は2008年度（2009年3月実施）の第1回から、2014年度（2015年3月実施）で、7回を数える。第1回の回収率は39.7%であったが、年度ごとに回収率は増加し、第6回は81.0%となった。しかし、今回（第7回）は78.9%とやや減少している。

この7回の調査項目を時系列的に見ると、多くの項目でそれほど大きな変化はみられない。もともと、身につけた能力の自己評価や満足度や意識などは比較的变化しにくい特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、この間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、経年変化を見ることにする。

「国際活動」、「国際経験」、「満足度」、「外国語でコミュニケーションする能力」は増加する傾向にあるが、今年度はやや減少している

「大学のプログラム／推薦による留学や個人留学」は2013年度に大幅に増加したが、今年度はやや減少している

Q21 在学時の国際交流経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

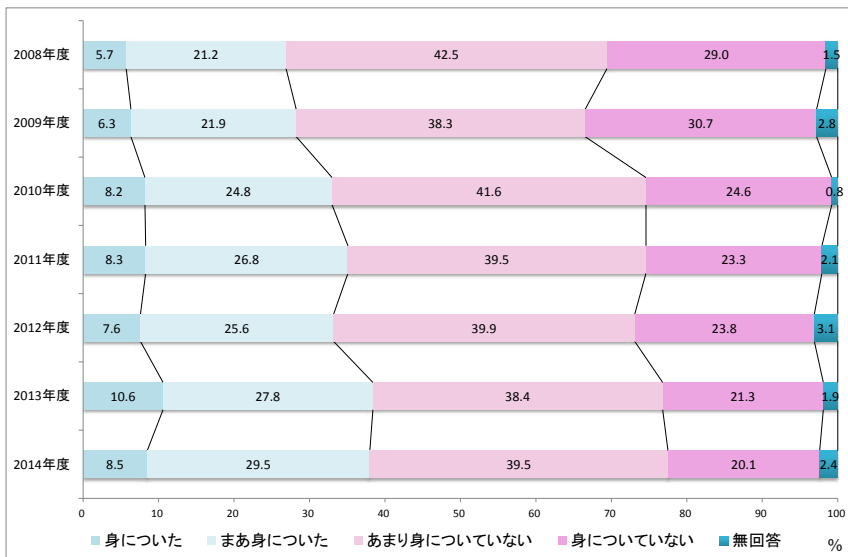


「B. 個人留学した(語学学習)」は2012年度の8.5%から2013年度は9.9%、2014年度は10.0%(以下、同様)と増加傾向にある。同じく「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、9.8%、11.4%、11.7%と増加傾向にある。これに対して、「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」者は4.7%、8.3%、7.6%で、2013年度は2012年度から大幅に増加したが、2014年度は7.6%とやや減少した。同じように「C. 個人留学した(語学学習以外)」は3.6%、5.4%、3.1%と2014年度はやや減少した。「D. 海外でのインターンシップに参加した」は3.8%、5.8%、3.9%、「E. 海外でボランティアに参加した」は3.5%、6.4%、4.0%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は5.0%、7.6%、6.4%、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は43.3%、45.5%、43.6%といずれも2013年度は増加したが2014年度はやや減少している。

「外国語でコミュニケーションする能力」は増加傾向にあるが、今年度はやや減少している

Q 10. あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

外国語でコミュニケーションする能力

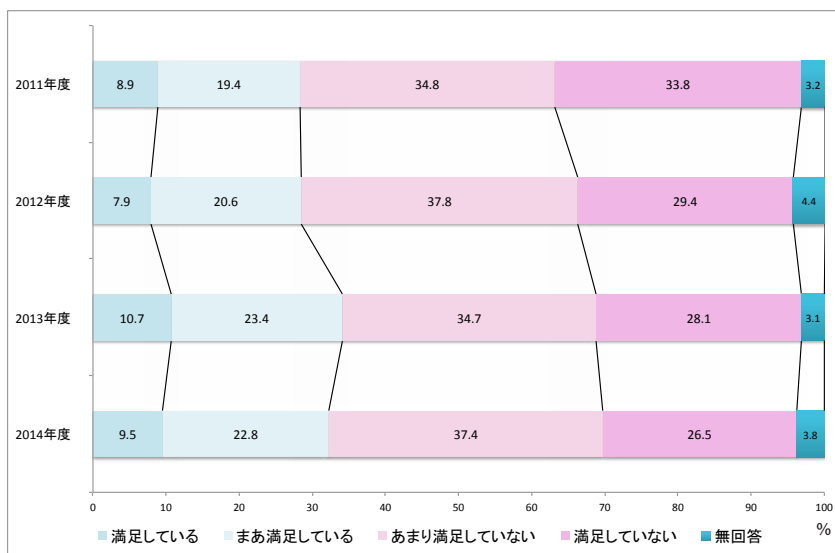


身につけた能力の自己評価で、この6年間に最も変化しているのは、「外国語でコミュニケーションする能力」で、2008年度には「身についた」5.7%、「まあ身についた」21.2%と合わせて26.9%であったが、年度ごとにやや増減はあるが、増加傾向にあり、2013年度には、「身についた」10.6%、「まあ身についた」27.8%と合わせて38.4%となった。しかし、2014年度には合わせて38.0%とやや減少している。

「国際経験」の満足度は増加傾向だが、2014年度はやや減少している

Q15 あなたの大学生活を通じた満足度についてお聞きします。

国際経験



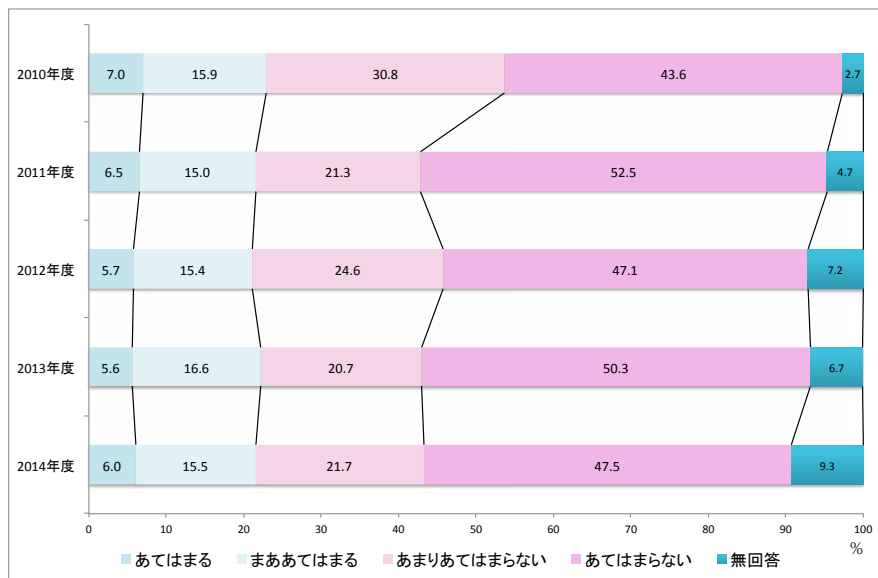
国際経験の満足度については、2011年度からたずねているが、2011年度は「満足している」8.9%と「まあ満足している」19.4%と合わせて28.3%であったが、2013年度は、それぞれ10.7%と23.4%で合わせて34.1%と増加傾向にあった。しかし、2014年度は合わせて32.3%とやや減少している。

「留学の障害」は大幅に減少

「語学力の問題で留学をあきらめた」者は減少傾向

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

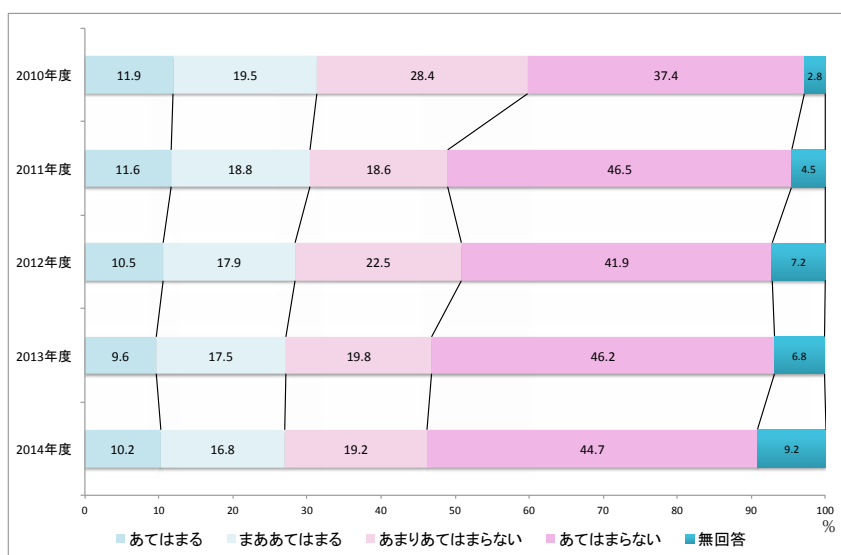
語学力の問題で留学をあきらめた



「語学力の問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」7.0%、「まああてはまる」15.9%で合わせて22.9%であったが、多少の増減はあるが、2014年度には「あてはまる」6.0%、「まああてはまる」15.5%で合わせて21.5%とやや減少傾向にある。

「経済的な問題で留学をあきらめた」者も減少傾向

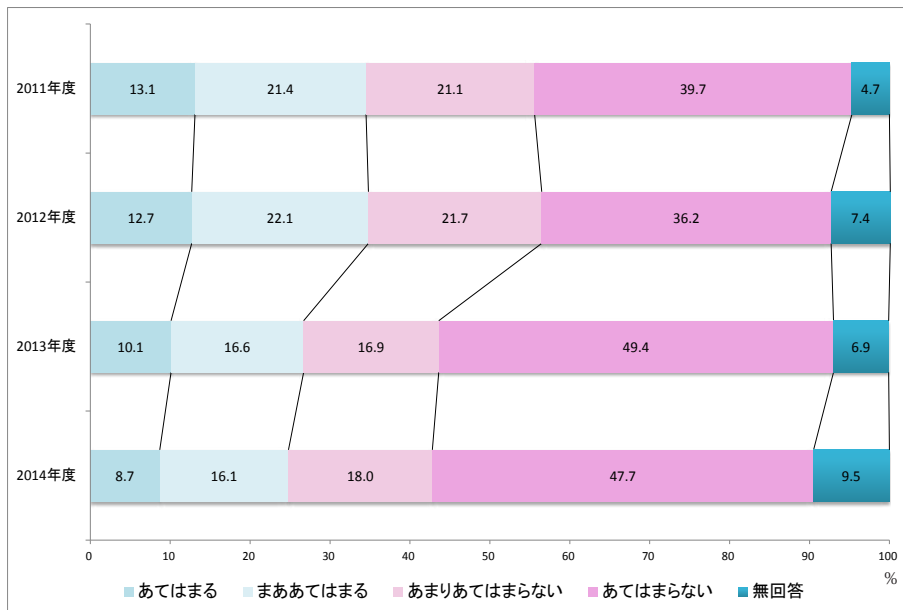
経済的な問題で留学をあきらめた



「経済的な問題で留学をあきらめた」者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」11.9%、「まああてはまる」19.5%で合わせて31.4%であったが、ほぼ一貫して減少しており、2014年度には「あてはまる」10.2%、「まああてはまる」16.8%で合わせて27.0%と減少傾向にある。

「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者も減少傾向

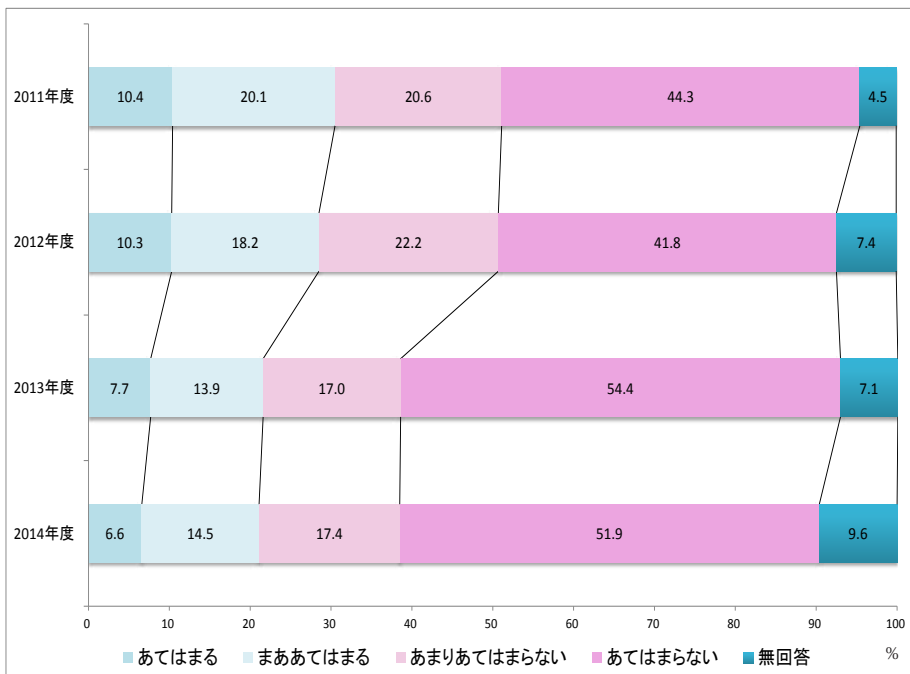
大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった



「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者の割合は、最初に調査された2011年度は「あてはまる」13.1%、「まああてはまる」21.4%で合わせて34.5%であったが、2012年度はやや増加したものの、ほぼ一貫して減少しており、2014年度には「あてはまる」8.7%、「まああてはまる」16.1%で合わせて24.8%と、2011年度より10%も減少している。

「大学院／就職試験が留学の妨げとなった」者は大幅に減少

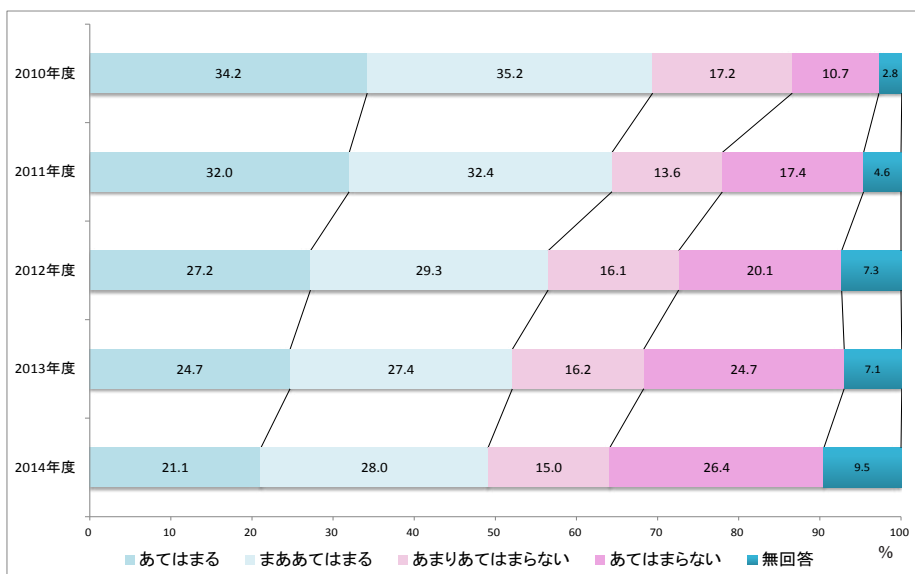
大学院／就職試験が留学の妨げとなった



「大学院／就職試験が留学の妨げとなった」者の割合も、最初に調査された2011年度は「あてはまる」10.4%、「まああてはまる」20.1%で合わせて30.5%であったが、一貫して減少しており、2014年度には「あてはまる」6.6%、「まああてはまる」14.5%で合わせて21.1%と大幅に減少している。

「後期課程の語学教育は不十分」とする者は大幅に減少する傾向

後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ



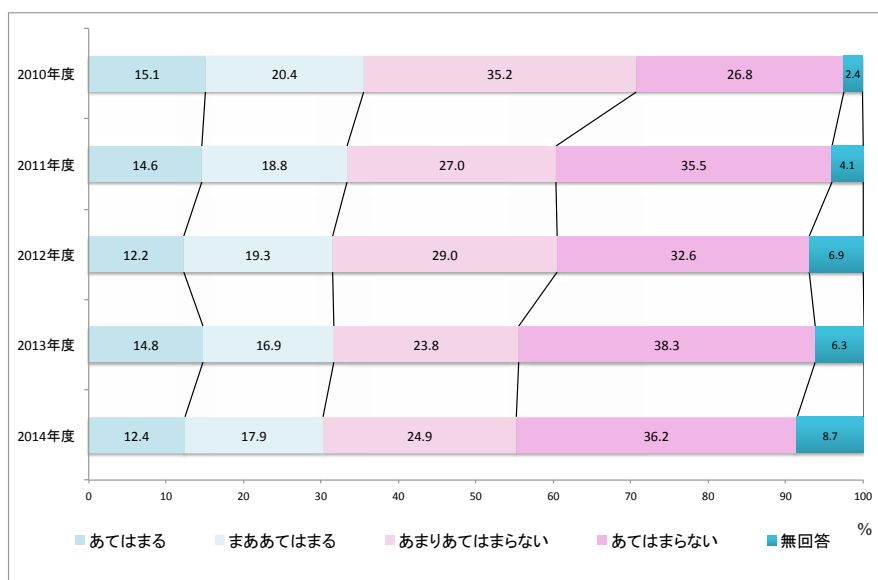
「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」34.2%、「まああてはまる」35.2%で合わせて69.4%であったが、一貫して減少しており、2014年度には「あてはまる」21.1%、「まああてはまる」28.0%で合わせて49.1%と大幅に減少している。

「留学」に関して否定的な傾向もある

「積極的に留学したい」者はやや減少傾向

Q23 留学や語学学習についてお聞きします。

積極的に留学をしたいと考えていた



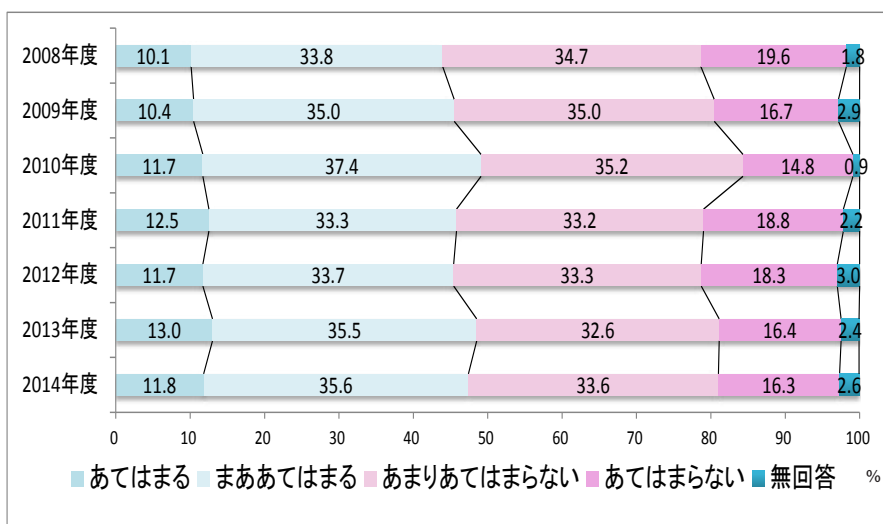
留学や語学学習について「積極的に留学をしたいと考えていた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」15.1%、「まああてはまる」20.4%で合わせて35.5%であったが、多少増減があるものの2014年度には「あてはまる」12.4%、「まああてはまる」17.9%で合わせて30.3%とやや減少傾向にある。

「TAが機能」や「ボランティア」や「インターンシップ」への参加は増加傾向

「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は年々わずかに増加

Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた

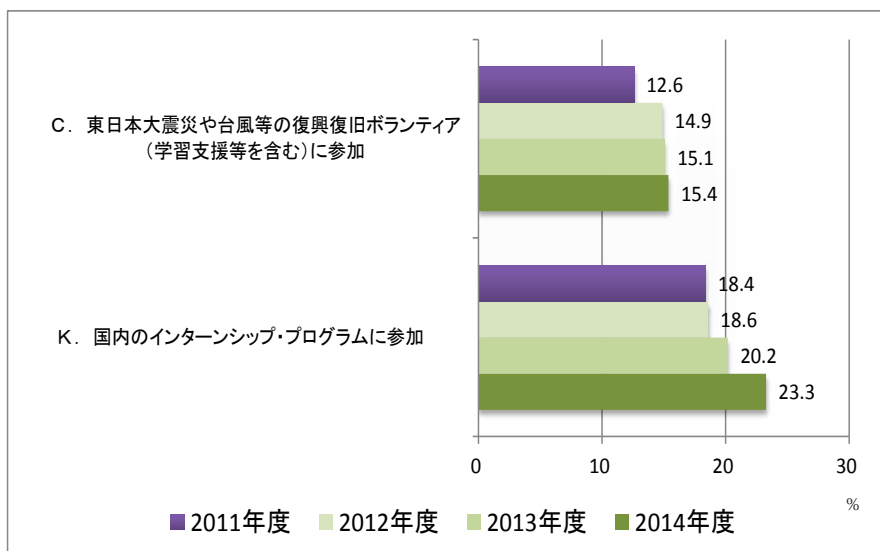


「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は、2008年度は「あてはまる」10.1%と「まああてはまる」33.8%を合わせて43.9%であったが、2013年度は48.5%と年々わずかに評価する者の割合が増加する傾向にあったが、2014年度は47.4%とやや減少している。

「ボランティア」や「インターンシップ」に参加した者の割合は増加傾向

Q18 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等を含む）に参加した
国内のインターンシップ・プログラムに参加した



「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等も含む）に参加」した者の割合も2011年度12.6%、2012年度14.9%、2013年度15.1%、2014年度15.4%と着実に増加している。

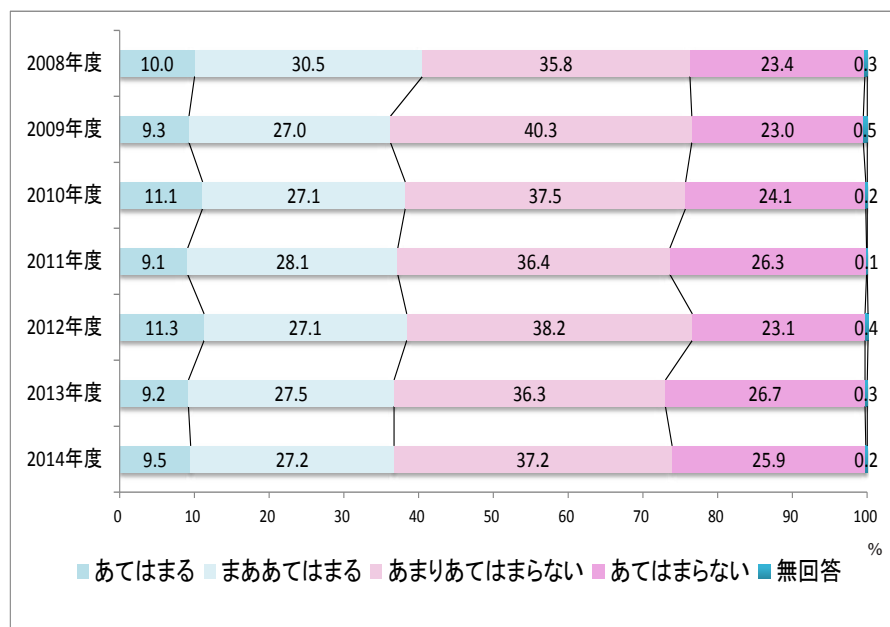
「国内のインターンシップ・プログラムに参加」した者の割合は、2011年度18.4%、2012年度18.6%、2013年度20.2%、2014年度23.3%と着実に増加している。

評価が下がったり、経験している割合が低くなっているも多い

「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者はわずかに減少

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。次のことは、どの程度あてはまりますか。

大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた

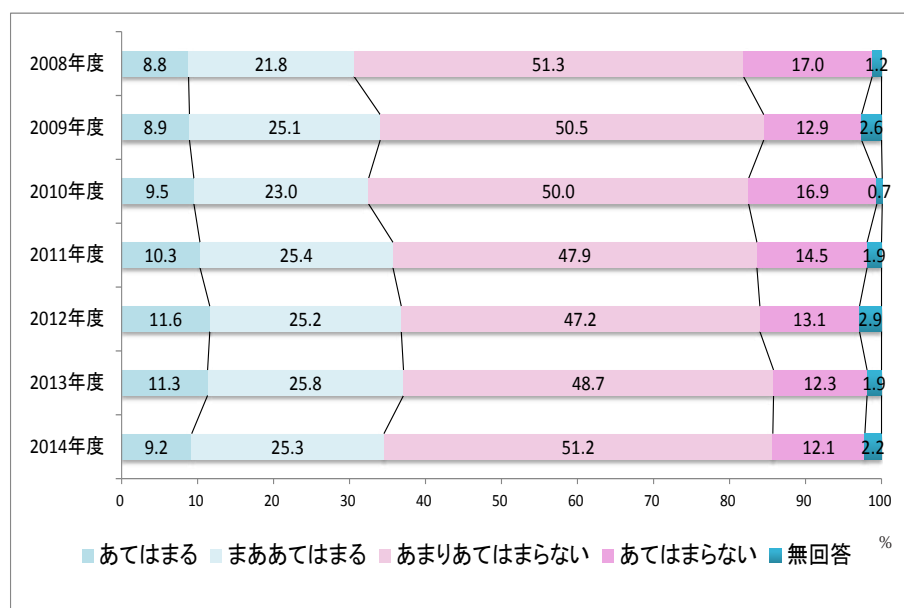


入学時の様子について、「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、年度ごとに増減があるが、2008年度「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%に対して、2014年度は「あてはまる」9.5%、「まああてはまる」27.2%で合わせて36.7%と年々わずかではあるものの、減少傾向にある。

「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は増加傾向にあるが、2014年度は減少

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。

必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった

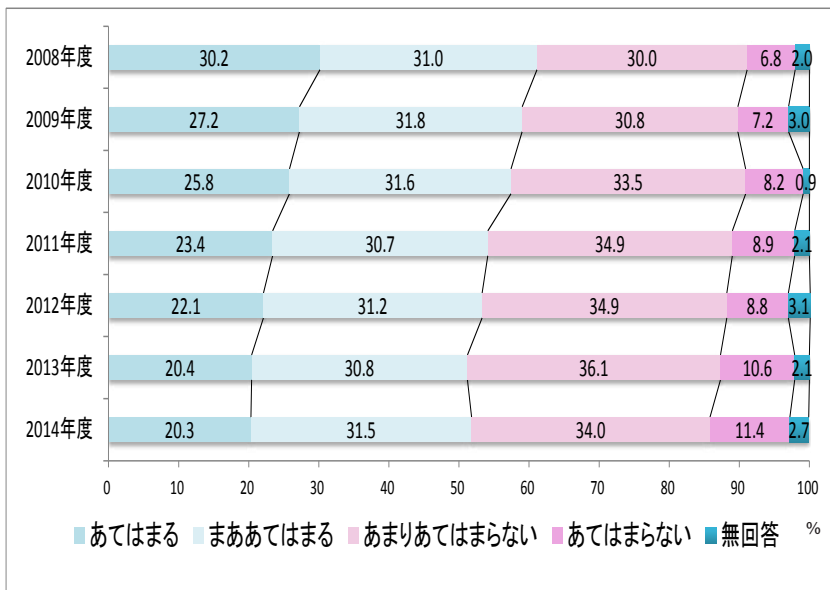


「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は、2008年度は「あてはまる」8.8%と「まああてはまる」21.8%を合わせて30.6%であったが、2013年度まで37.1%と年々増加傾向にあった。しかし、2014年度には34.5%とわずかではあるが減少している。

「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は大幅に減少傾向

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、次のようなことはどの程度あてはまりますか。

よく自分の専門以外の本を読んだ

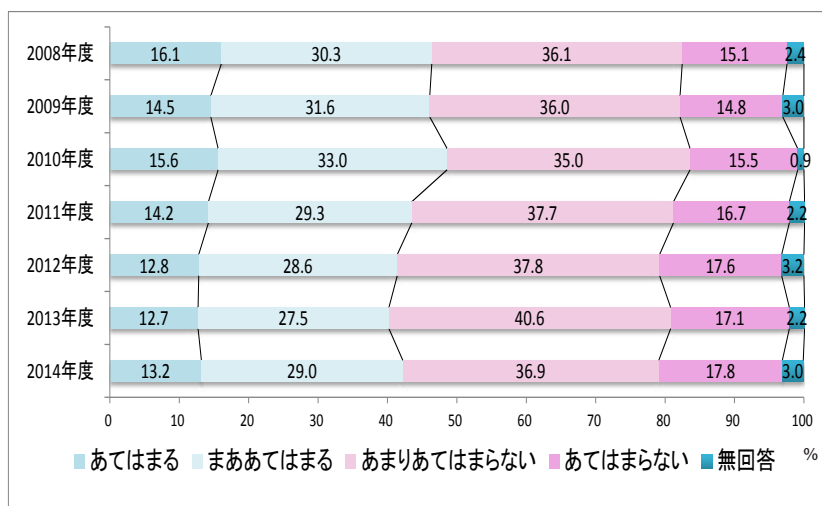


大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は2008年度には「あてはまる」30.2%、「まああてはまる」31.0%で合わせて61.2%であったが年々減少し、2013年度には「あてはまる」20.4%、「まああてはまる」30.8%で、合わせて51.2%と、この間に10.0%と大幅に低下している。

しかし、2014年度は「あてはまる」は20.3%で、2013年度と変わらないが、「まああてはまる」は31.5%で合わせて51.8%とわずかではあるが増加している。

「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」者も減少傾向、2014年度はやや増加

社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ

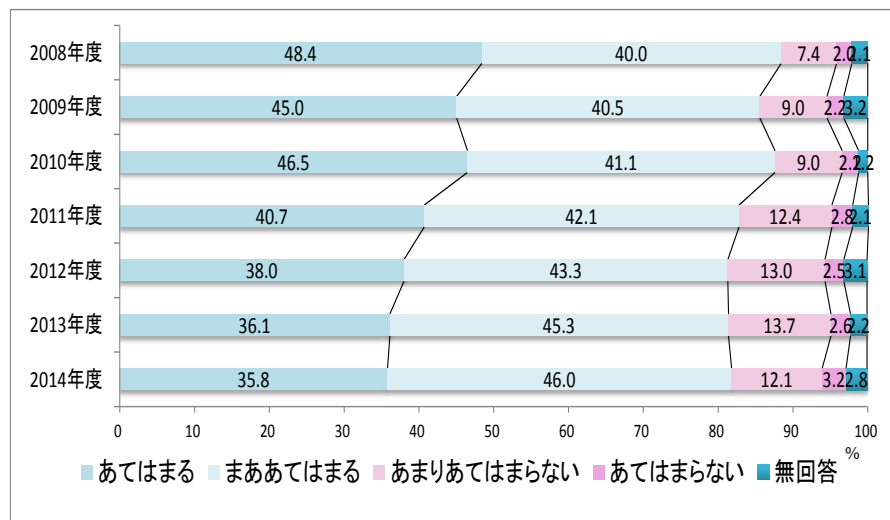


同じように、「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」も、2008年度には「あてはまる」16.1%、「まああてはまる」30.3%で合わせて46.4%であったが、若干の増減はあるものの、年々減少し、2013年度には「あてはまる」12.7%、「まああてはまる」27.5%で、合わせて40.2%と、6.2%低下していた。しかし、2014年度は「あてはまる」は13.2%、「まああてはまる」は29.0%で合わせて42.2%とやや増加している。

「あてはまる」は13.2%、「まああてはまる」は29.0%で合わせて42.2%とやや増加している。

「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合も減少傾向

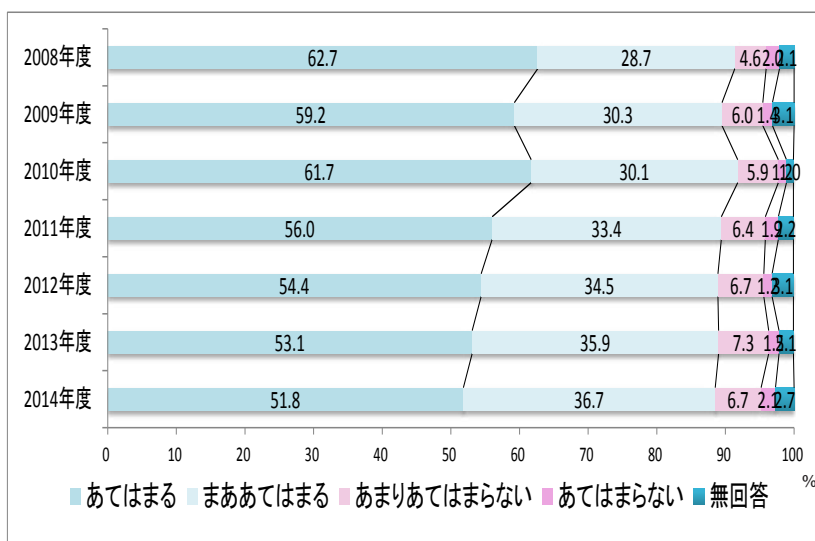
議論したり考えたりする友達を得られた



「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」48.4%、「まああてはまる」40.0%で合わせて88.4%であったが年度ごとに多少の増減はあるものの年々減少傾向にあり、2014年度には「あてはまる」35.8%、「まああてはまる」46.0%で、合わせて81.8%と、この間約7%低下している。

「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合も減少傾向

優れた友人に感心したり感化されたりした

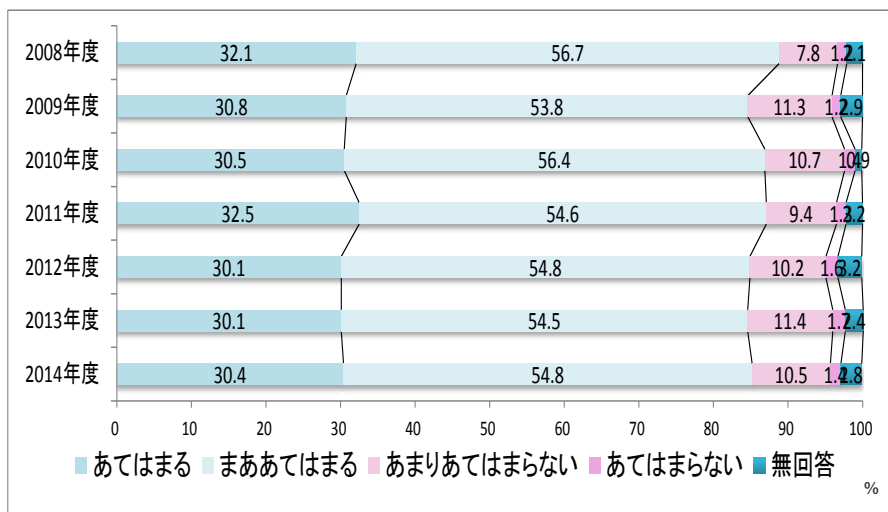


「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」62.7%、「まああてはまる」28.7%で合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2014年度には「あてはまる」51.8%、「まああてはまる」36.7%で、合わせて88.5%と、わずかではあ

るが、減少傾向にある。さらに、「あてはまる」者のみの割合では、62.7%から51.8%と10.9%の減少となっている。

「自分なりのものの考え方を得られた」者もわずかに減少傾向

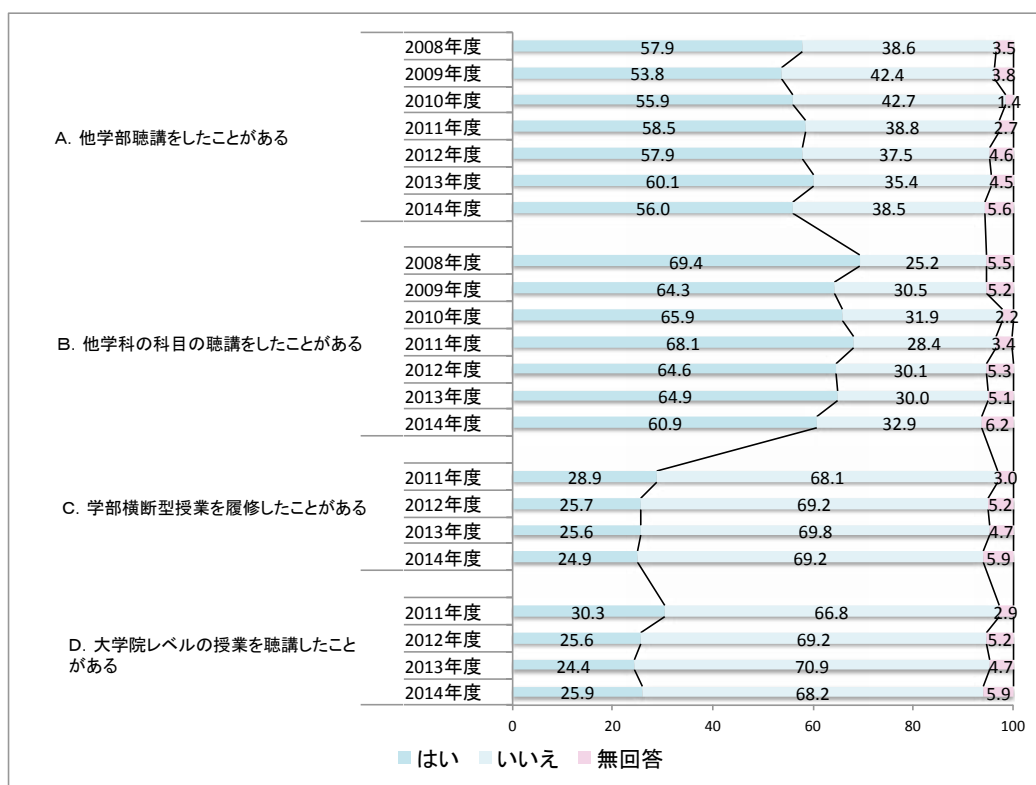
自分なりのものの考え方を得られた



同じように、「自分なりのものの考え方を得られた」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」32.1%、「まああてはまる」56.7%で合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、やや減少傾向にあり、2014年度には「あてはまる」30.4%、「まああてはまる」も54.8%と、合わせて85.2%と減少している。

「他学部聴講」、「他学科の科目の聴講」、「学部横断型授業の聴講」、「大学院レベルの授業の聴講」も減少傾向、「大学院レベルの授業の聴講」は2014年度はわずかに増加

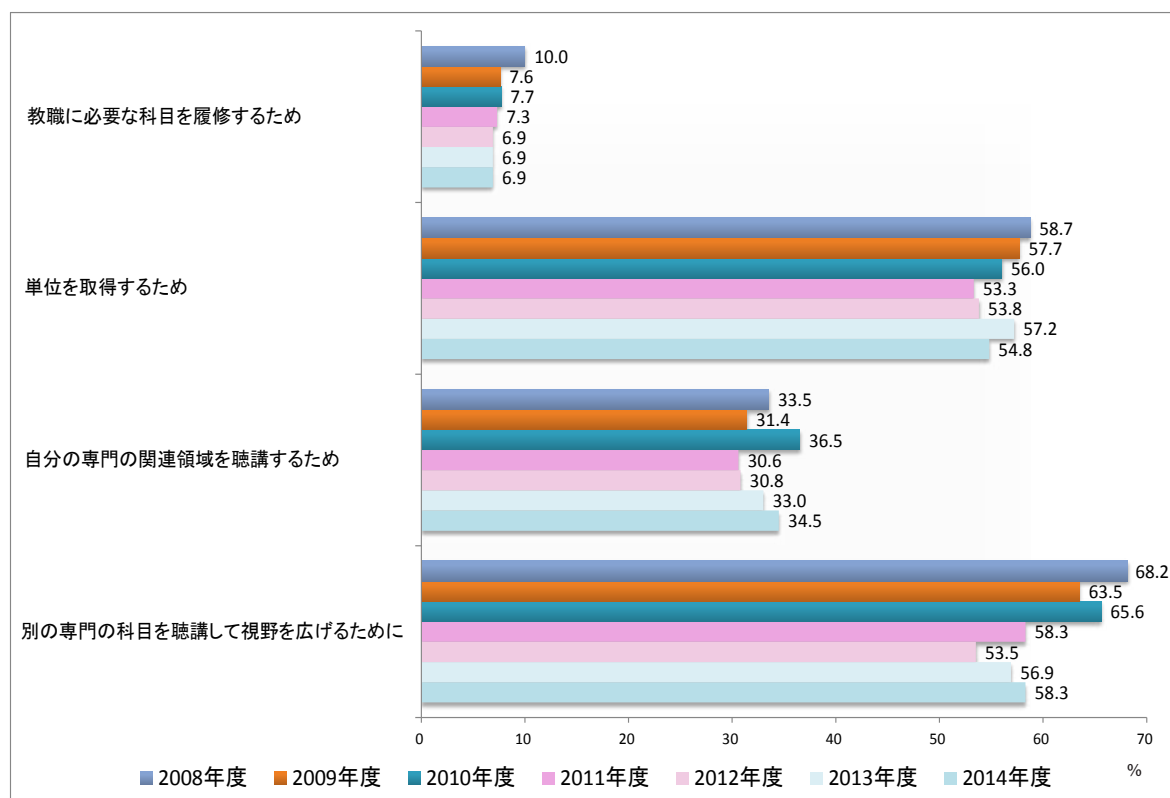
Q17 他学部聴講などについてお聞きます。



「他学部聴講」した者の割合は、2008年度57.9%から、2011年度の58.5%まで増加していたが、2012年度は57.9%とやや減少し、2013年度は60.1%とこれまでで最高となった。しかし、2014年度は56.0%とやや減少している。また、「他学科の科目の聴講」も同様に年度による増減はあるが69.4%から60.9%に減少している。「学部横断型授業」は2011年度からたずねているが、28.9%から24.9%と減少傾向にある。同じように、「大学院レベルの授業の聴講」も30.3%から2013年度は24.4%と減少傾向にあった。しかし、2014年度は25.9%とわずかに増加している。

「他学部聴講の目的」は「教職科目の履修」や「視野を広げるため」が減少傾向

SQ 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。

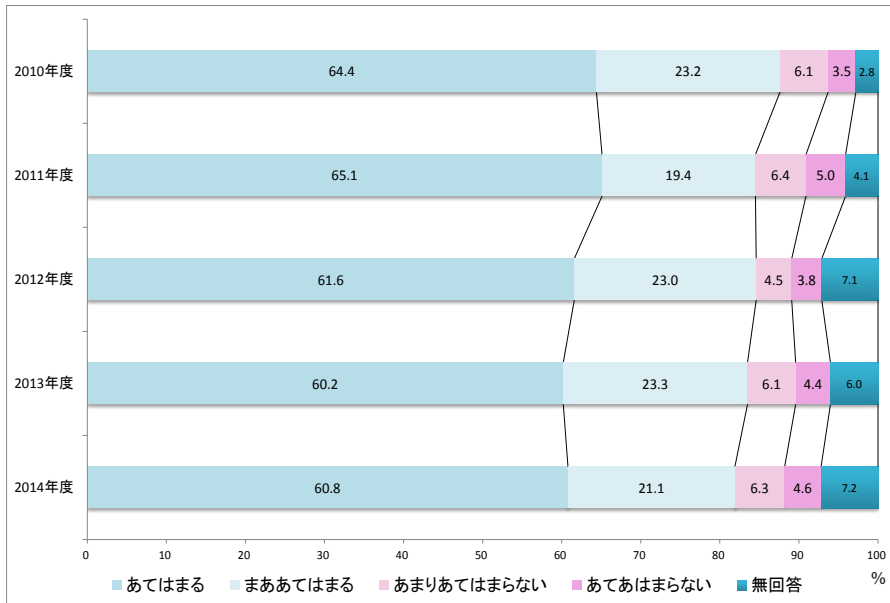


他学部聴講などの受講の意図については、「教職に必要な科目を履修するため」が2008年度の10.0%から2014年度は6.9%とやや減少している。また、「別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」も2008年度の68.2%から2014年度には58.3%と約10%減少している。なお、無回答の割合が増加していて、このことも上記の項目の割合の減少と関連しているとみられる。

「進学先を希望通りに決めることができた」者はやや減少

Q24 進学振分けについてお聞きします。つぎの項目について、あなたはどのように考えていますか。

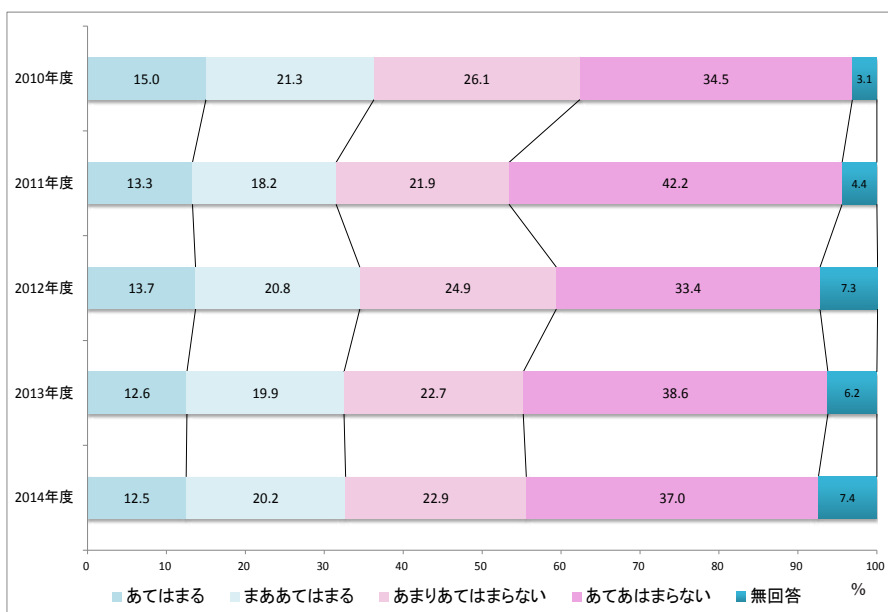
進学先を希望通りに決めることができた



「進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は「あてはまる」64.4%、「まああてはまる」23.2%で合わせて87.6%であったが、年々減少傾向にあり、2014年度には「あてはまる」60.8%、「まああてはまる」21.1%で合わせて81.9%となっている。

「途中で興味が変わって進路希望を考え直した」者もやや減少

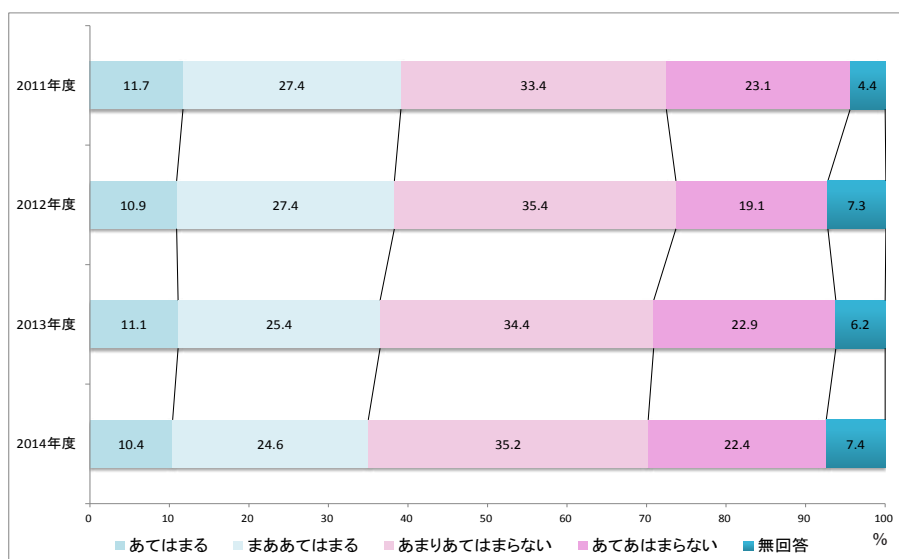
途中で興味が変わって進学希望を考え直した



「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010年度は「あてはまる」15.0%、「まああてはまる」21.3%で合わせて36.3%であったが、年々減少傾向にあり、2014年度には「あてはまる」12.5%、「まああてはまる」20.2%で合わせて32.7%となっている。特に「あてはまる」は2010年度の15.0%からほぼ一貫して減少し、2014年度には12.5%と減少している。

「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者はやや減少

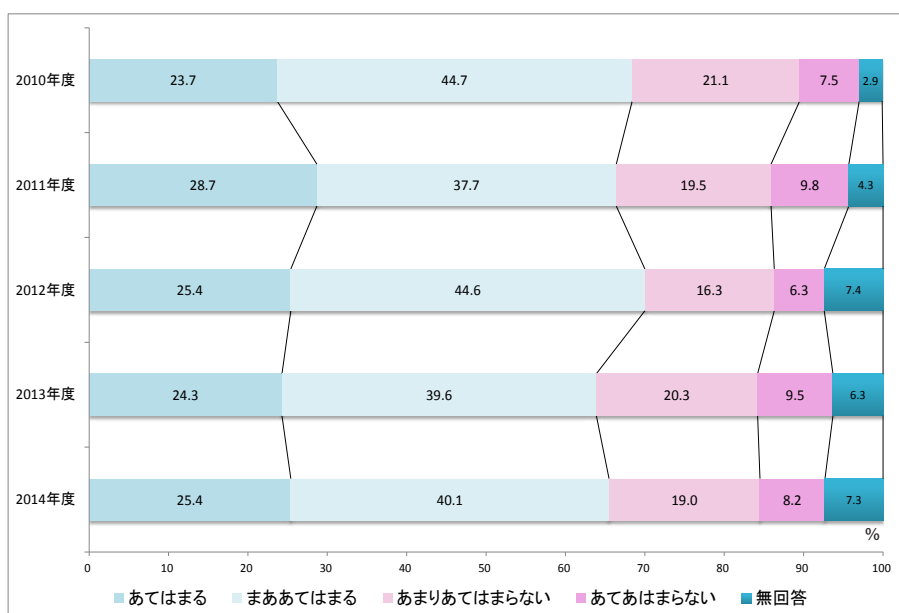
現在の進振り制度は複雑すぎる



「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者は、2011年度は「あてはまる」11.7%、「まああてはまる」27.4%で合わせて39.1%であったが、年々わずかに減少傾向にあり、2014年度には「あてはまる」10.4%、「まああてはまる」24.6%で合わせて35.0%と、やや減少している。

「進学先はイメージしていた通りだった」者は年度ごとに増減しているが、2014年度はわずかに増加

進学先は進学前にイメージしていた通りだった

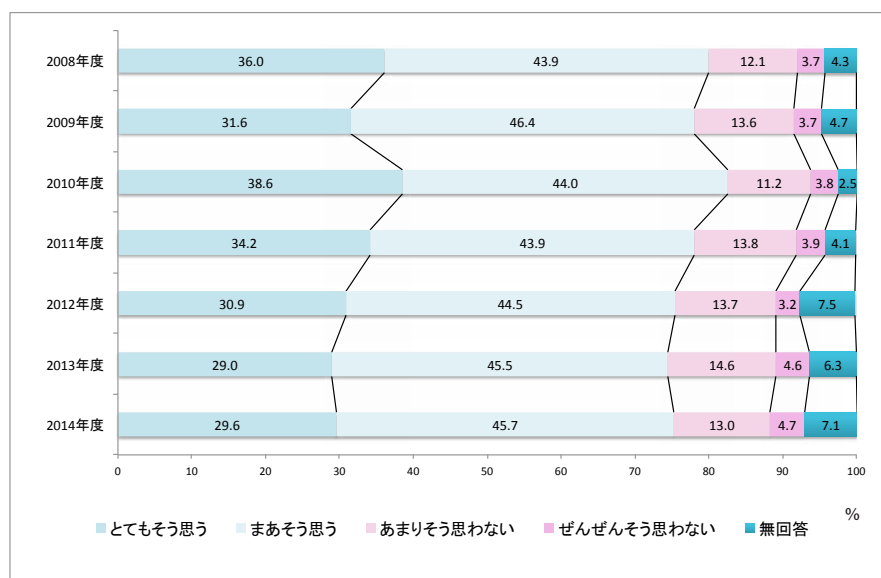


「進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、2010年度は「あてはまる」23.7%、「まああてはまる」44.7%で合わせて68.4%であったが、年度ごとに増減があり、2013年度には「あてはまる」24.3%、「まああてはまる」39.6%で合わせて63.9%とやや減少傾向にあった。しかし、2014年度はそれぞれ25.4%と40.1%で、合わせて65.5%とわずかに増加している。

「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深める」現行方式の支持はやや減少傾向にあったが、2014年度はわずかに増加

Q25 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。

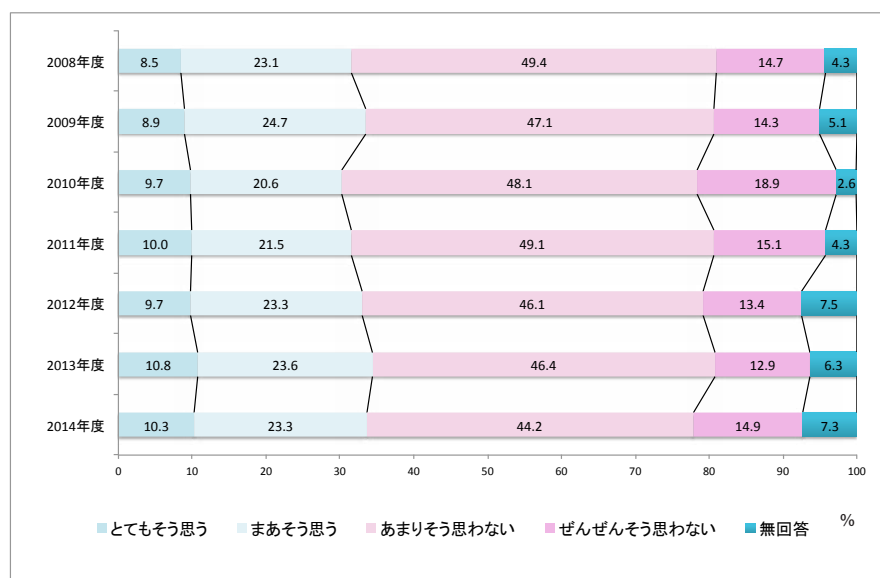
前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい



「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」36.0%、「まあそう思う」43.9%で合わせて79.9%であったが、2010年度の82.6%をピークに減少し、2013年度には合わせて74.5%とやや減少傾向にあった。しかし、2014年度は合わせて75.3%とわずかなではあるが増加している。

「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいく」方式の支持はやや増加傾向にあるが、2014年度はやや減少

入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい



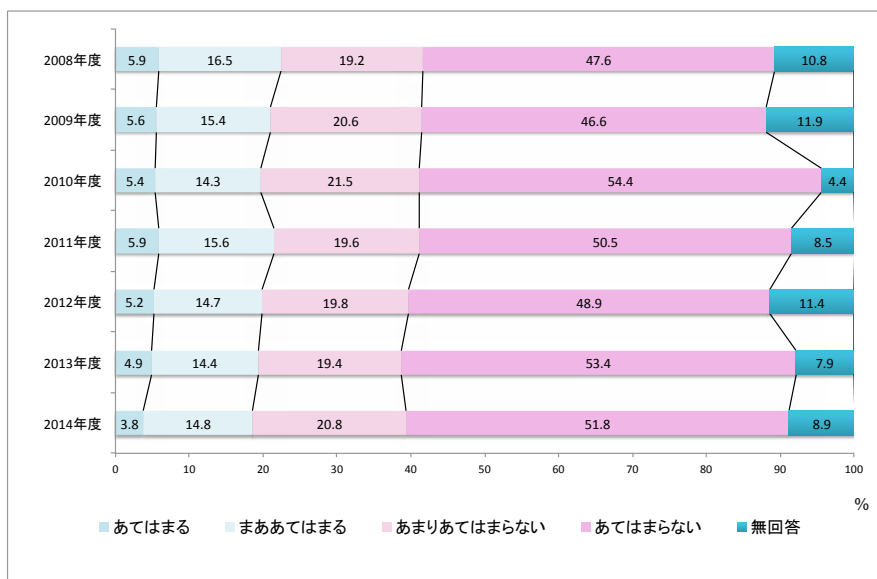
これに対して、「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%、「まあそう思う」23.1%で合わせて31.6%であったが、2010年度にやや減少したものの、その後増加傾向にあり、2013年度まで合わせて34.4%とやや増加傾向にあった。しかし、2014年度は合わせて33.6%とわずかなではあるが、減少した。

進路については、肯定的な傾向も否定的傾向も見られる

「就職活動のために勉強の時間が取れなかった」者はやや減少

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。つぎのようなことは、どの程度あてはまりますか。

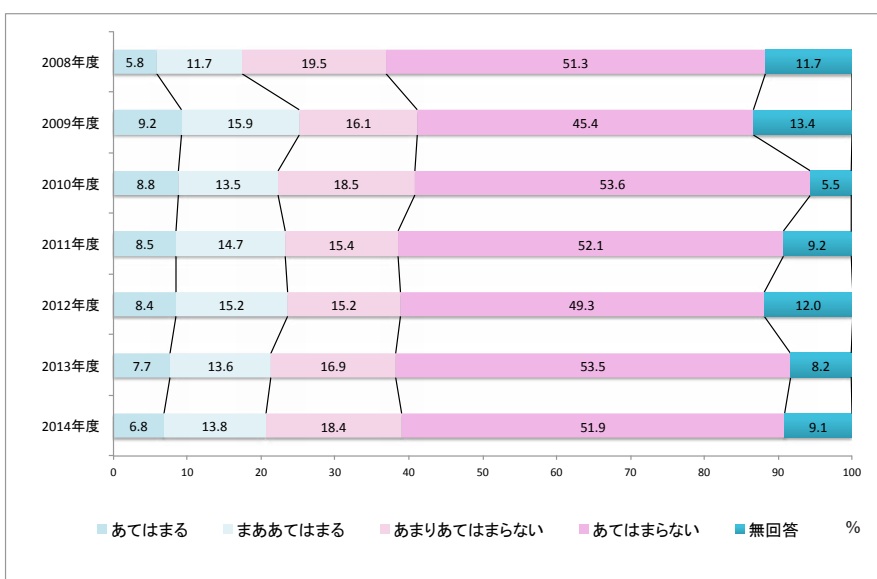
就職活動のために勉強の時間がとれなかった



「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.9%、「まああてはまる」16.5%で合わせて22.4%であったが、やや年毎の増減はあるものの、2014年度には合わせて18.6%と減少傾向にある。

「厳しい就職活動になった」者もやや減少傾向

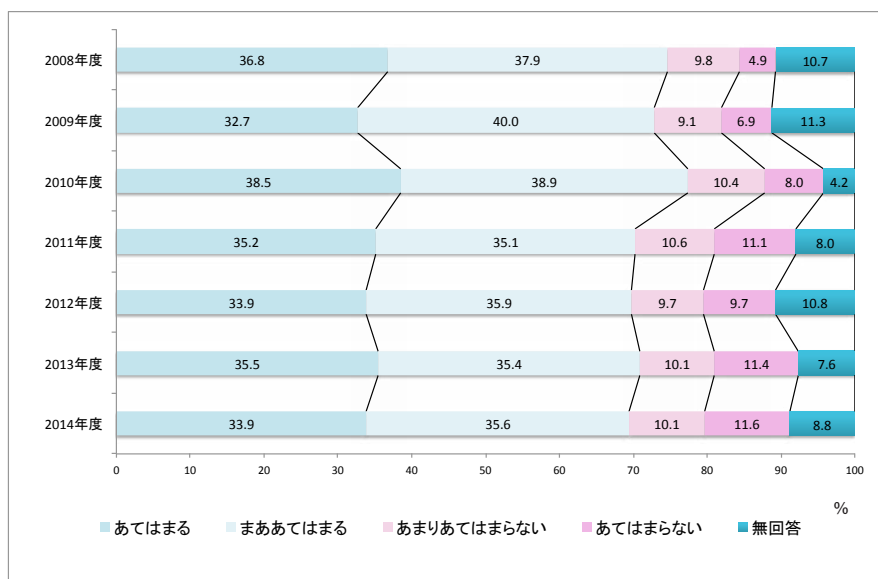
厳しい就職活動となった



「厳しい就職活動になった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.8%、「まああてはまる」11.7%で合わせて17.5%であったものが、2009年度には25.1%と増加している。しかし、その後はわずかに増減しているが、減少傾向にあり、2014年度には20.6%となっている。

「満足のいく進路決定ができた」者はやや減少傾向

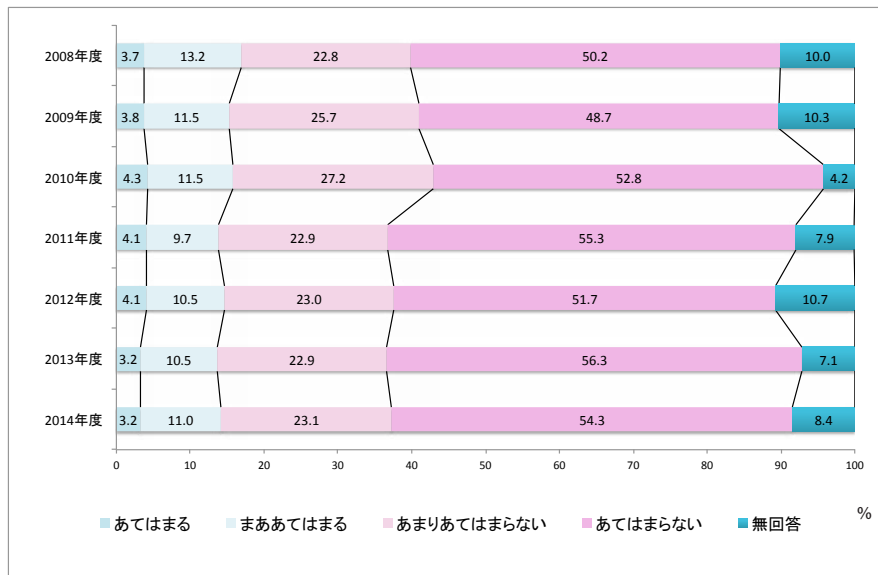
満足のいく進路決定ができた



「満足のいく進路決定ができた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」36.8%、「まああてはまる」37.9%で合わせて74.7%であったが、2010年度の77.4%をピークに減少し、2014年度には合わせて69.5%とやや減少傾向にある。

「大学の進路相談の機会が役に立った」者はやや減少傾向、2014年度はやや増加

大学の進路相談の機会が役に立った

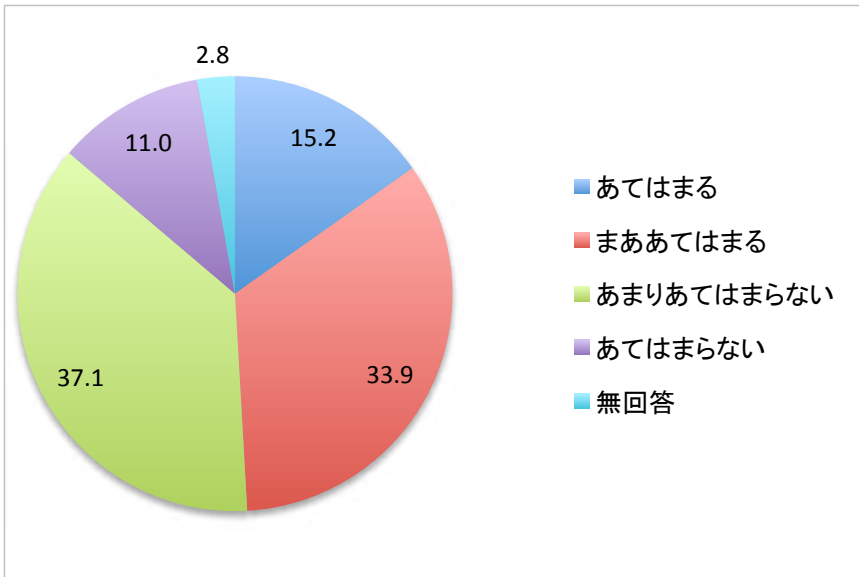


「大学の進路相談の機会が役に立った」者の割合は、2008年度は「あてはまる」3.7%、「まああてはまる」13.2%で合わせて16.9%であったものが、年度ごとに増減はあるが、減少傾向にあり、2013年度には13.7%となっていた。2014年度は14.2%とわずかながら増加している。

ほとんどの場合、増加や減少の割合は小さいが、年度ごとに減少あるいは増加の傾向が明確にみられるものも多い。しかし、この傾向が続くのか、またいかなる要因によるのかについては、引き続き検討が必要である。

「大学の途中でやる気が削がれてしまった」について

Q14A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった

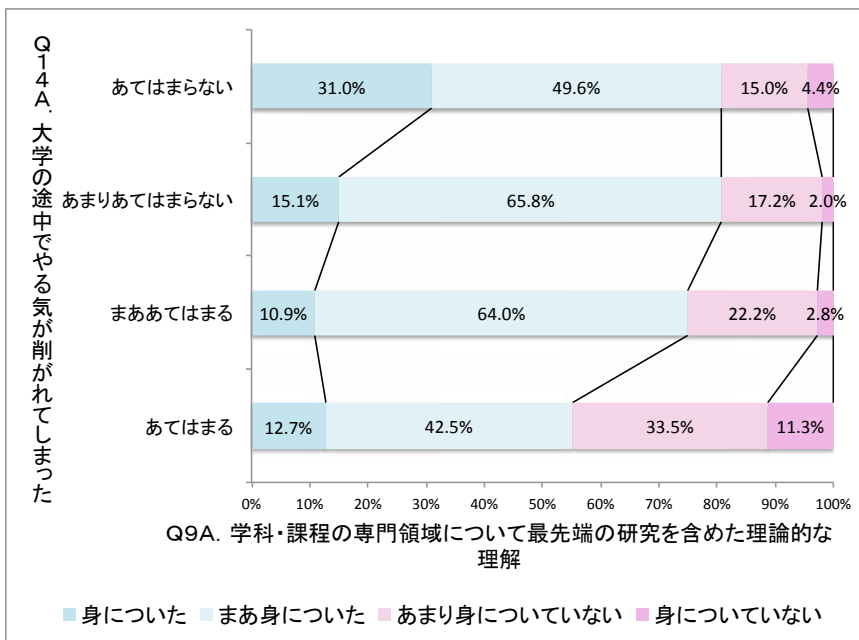


達成度調査の中には、「大学の途中でやる気が削がれてしまった」という質問がある。グラフのように、2014年度について、「あてはまる」と回答した者は15.2%、「まああてはまる」と回答した者は33.9%で、合わせる49.1%と半数近くがやる気が削がれてしまったと回答している。

このように、半数近くの者が「やる気が削がれてしまった」という回答は、大きな問題を持っている可能性がある。実際、以下に

示すように、多くの質問項目との関連でやる気が削がれてしまった者は様々な問題があることがうかがわれる。典型的な質問項目をいくつか示す。

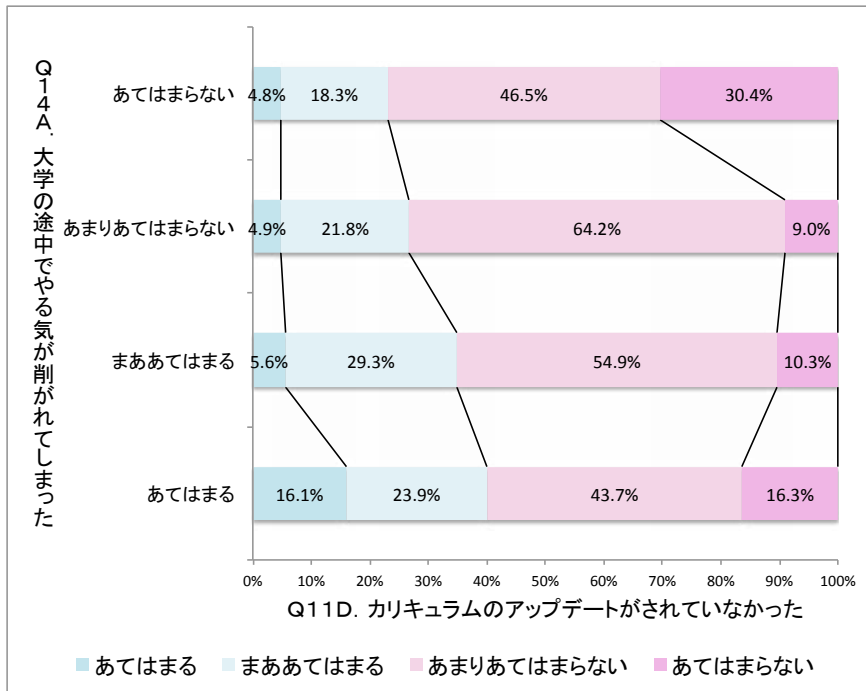
「やる気が削がれてしまった者」は身につけた能力の自己評価が低い



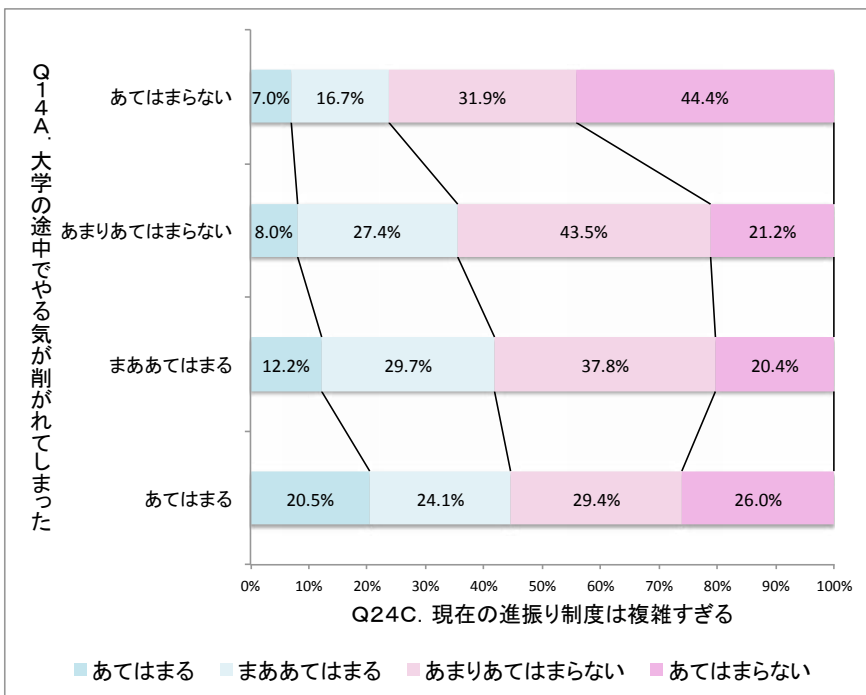
「やる気が削がれてしまった者」は、身につけた能力の自己評価について、多くの項目で、低い評価をしている。グラフは「学科・課程の専門領域について最先端の研究を含めた理論的な理解」と「やる気が削がれてしまった」との関連をみたものであるが、「やる気が削がれてしまった」に「あてはまる」と「まああてはまる」と回答した者の方が、能力が身につけていないとしている。ただし、「あてはまる」については、やや「まあ

あてはまる」より「身についた（あてはまる）」と回答する割合が高くなっているが、この傾向は他の多くの質問項目でも見られる（グラフは省略）。

「やる気が削がれてしまった」者は、大学教育に対して否定的な評価をする割合が高い

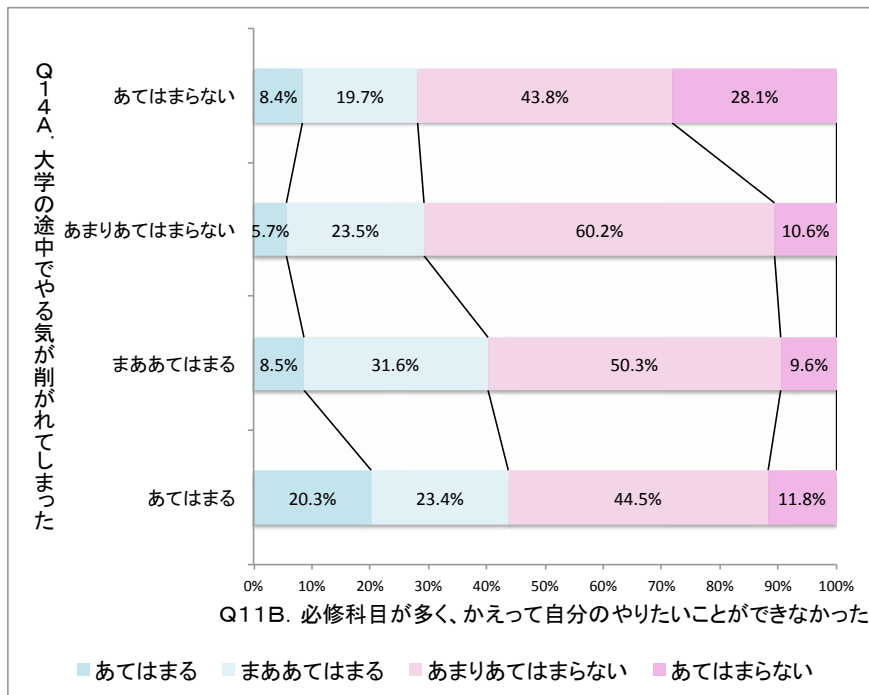


「やる気が削がれてしまった」者は、「カリキュラムのアップデートがされていなかった」とする割合が高い。また、「専門領域の全体が理解しづらかった」という割合も高くなっている。さらに、「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする割合も高くなっている（グラフは省略）。

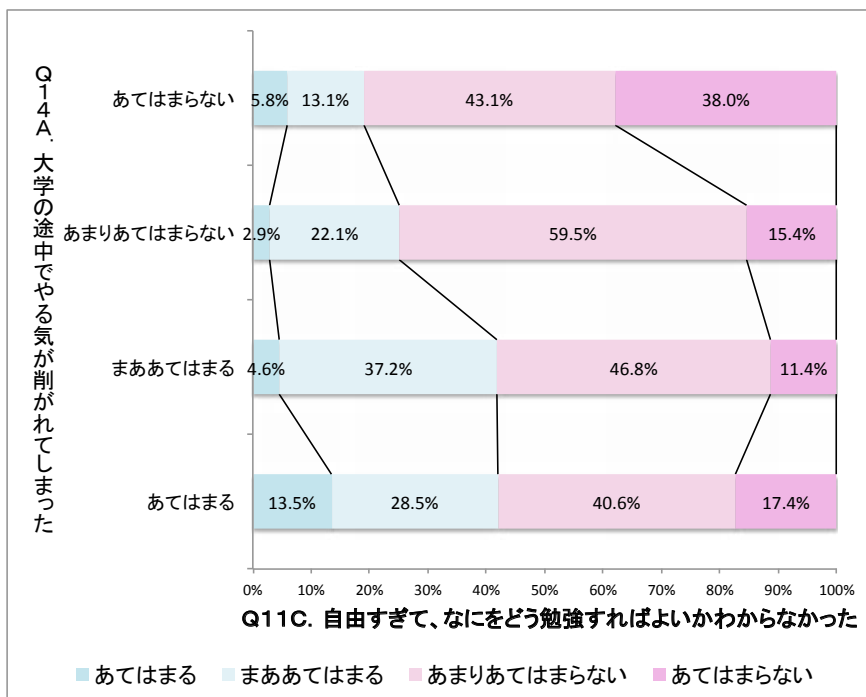


また、「やる気が削がれてしまった者」は、グラフのように、「現在の進振り制度は複雑すぎる」と回答する割合が高くなっている。

「やる気が削がれてしまった」者は、自分のやりたいことができなかつたと回答する反面、自由すぎてなにをどう勉強するかわからない、としている



「やる気が削がれてしまった者」は、「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかつた」とする割合が高くなっている。



他方、「やる気が削がれてしまった者」は、「自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかつた」とする回答の割合も高くなっている。

このように、一見矛盾した傾向があることは、「やる気が削がれてしまった」者が同質ではなく、異なるタイプのサブグループ、とりわけ異なる要因によって「やる気が削がれてしまった」サブグループに分かれていることを示唆している。

やる気が削がれてしまった要因は複数で、相反している

	B	
Q 5. 性別	.158	***
Q 1 1 B. 必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった	.141	***
Q 1 1 C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった	.135	***
Q 2 8 F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった	.099	***
Q 2 4 C. 現在の進振り制度は複雑すぎる【進学振分け】	.070	***
Q 1 1 D. カリキュラムのアップデートがされていなかった	.061	**
Q 2 4 B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した【進学振分け】	.056	***
Q 1 3 D. 自主勉強会など自分の興味ある学習をする機会を得られた	-.041	**
Q 1 0 I. 自ら企画を立て、実現させていく能力	-.056	**
Q 2 8 G. 満足のいく進路決定ができた	-.068	***
Q 1 3 A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ	-.069	***
Q 9 A. 学科・課程の専門領域について最先端の研究を含めた理論的な理解	-.083	***
Q 9 I. グローバルな思考と行動力	-.089	***
Q 2 4 D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった【進学先】	-.103	***
(定数)	1.790	***
R*	.169	

これまでみてきた質問項目を総合的に判断するために、すべての項目を対象として、「Q14A やる気が削がれてしまった」を被説明変数とする重回帰分析をステップワイス法で行い、最終的にやる気が削がれてしまった外的要因を探ることとした。結果は表の通りで、「Q11B 必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった」が最も強い関連を示しているが、次いで「Q11C 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」となっており、先に見た相反する要因が挙げられている。

このことからやる気が削がれてしまった要因は複数で、一見すると矛盾して相反しているとみることができる。

ついで、「Q28F 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」の影響が大きい。さらに、「Q24C 現在の進振り制度は複雑すぎる」と「Q24B 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」、「Q24D 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」（負の相関）など、進路に関する項目が多く挙げられており、やる気が削がれてしまった要因として進路あるいは進振りに関連していると見ることができる。

以上、「やる気が削がれてしまった」者と他の項目との関連を分析したが、単純な正や負の相関関係でなく、2極化している場合などもみられた。また、この他にも解釈が難しい例もあった。

しかし、「やる気が削がれてしまった」者に、多くの他の質問項目と相関関係がみられ、全体としてネガティブなものも多く、かなり問題があることが明らかにされた。また、「自由すぎてなにをどう勉強すればよいかわからなかった」と大学に期待あるいは依存して学習しようとしたがそれが果たされずやる気が削がれてしまったと思われるタイプと、「必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった」とする主体的な学習を望みながら、それが果たされないため、やる気が削がれてしまったと思われるタイプなど、複数の学生タイプあるいは外的要因が示された。このため、こうした点をさらに追求していく必要がある。



この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、大学総合教育研究センターを通じて行ってください。

東京大学広報室

no. 1479 2016年3月18日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学総合教育研究センター
大学改革基礎調査部門
e-mail : enq@he.u-tokyo.ac.jp